

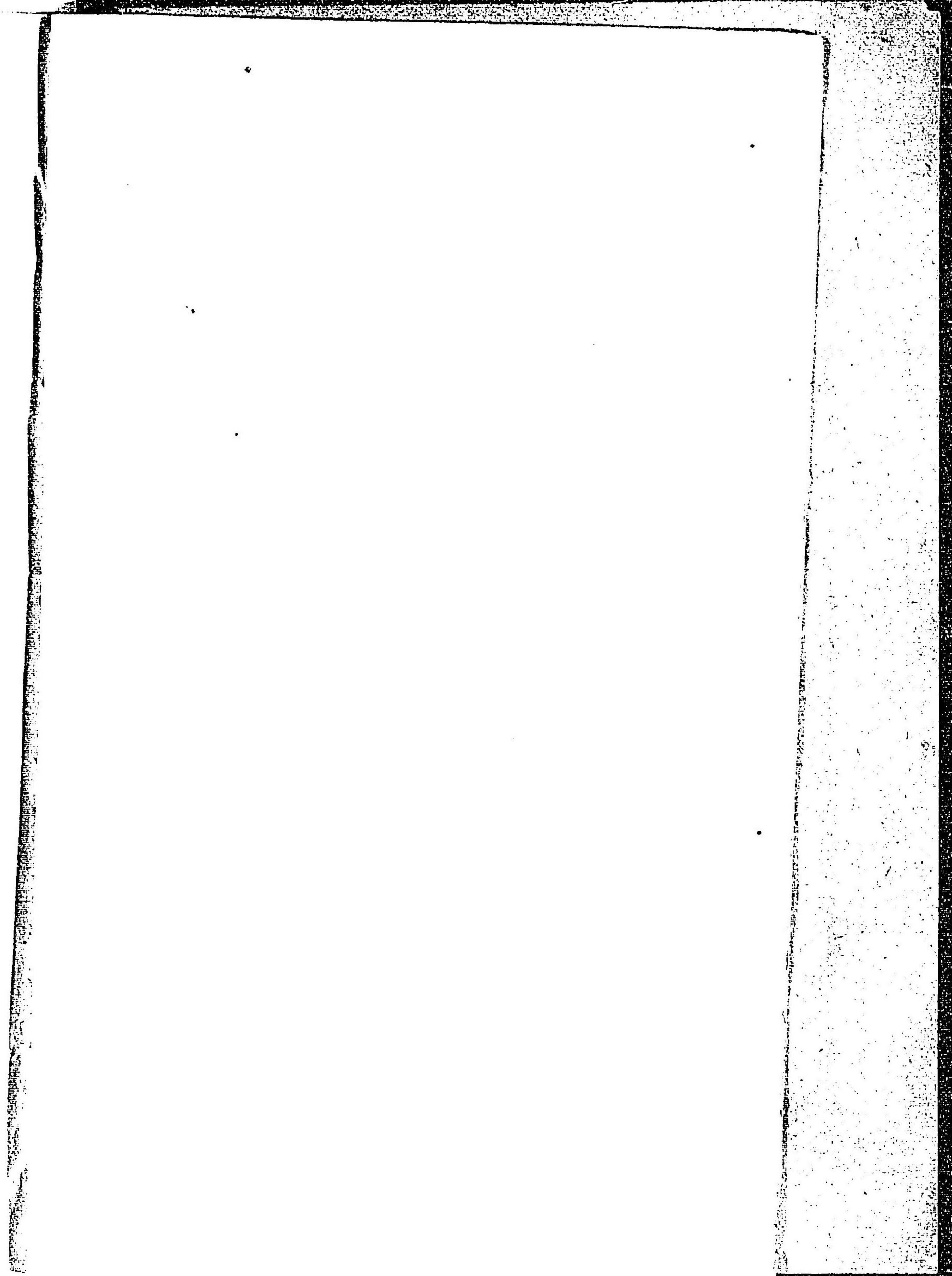
文
1104

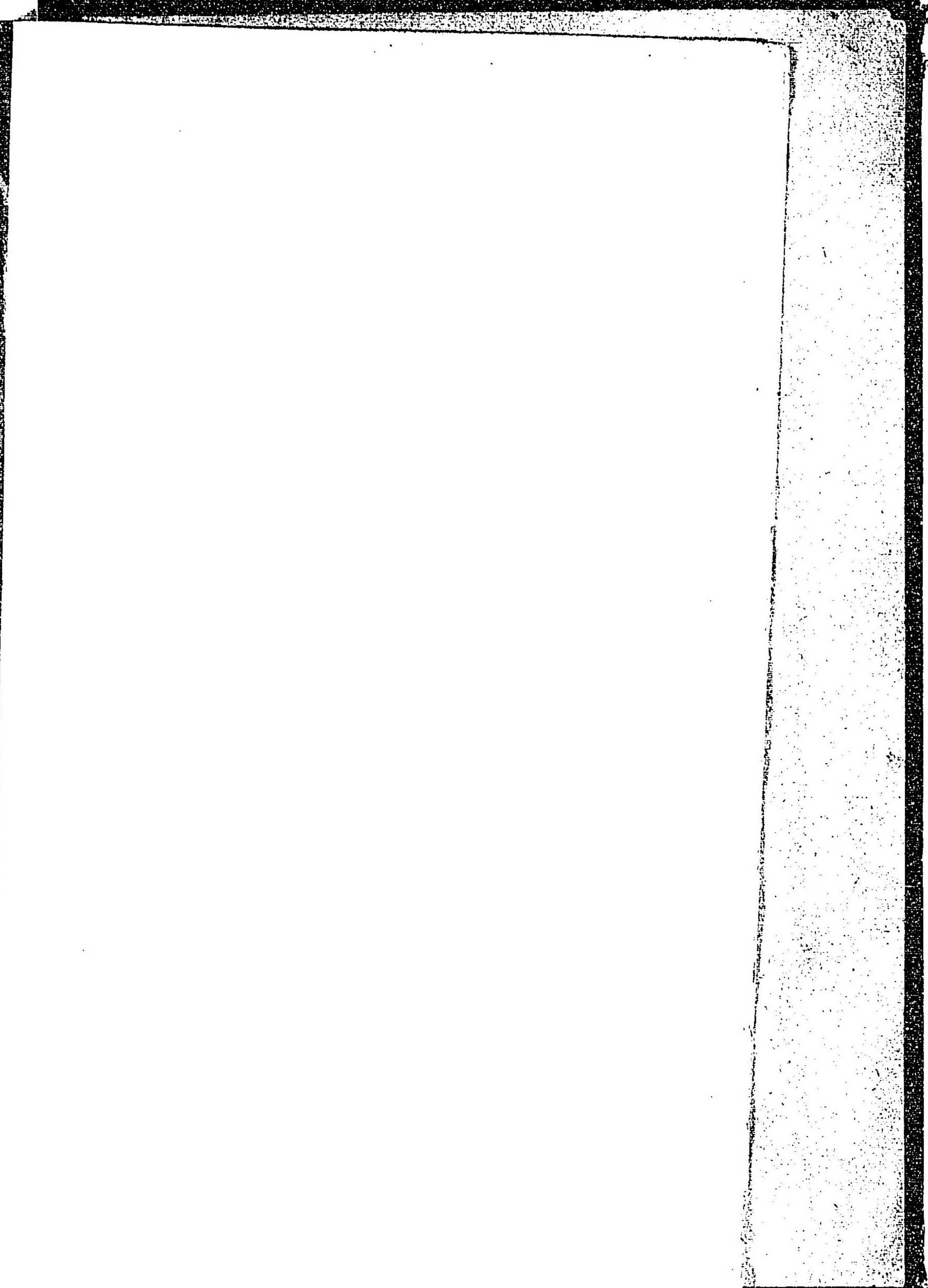
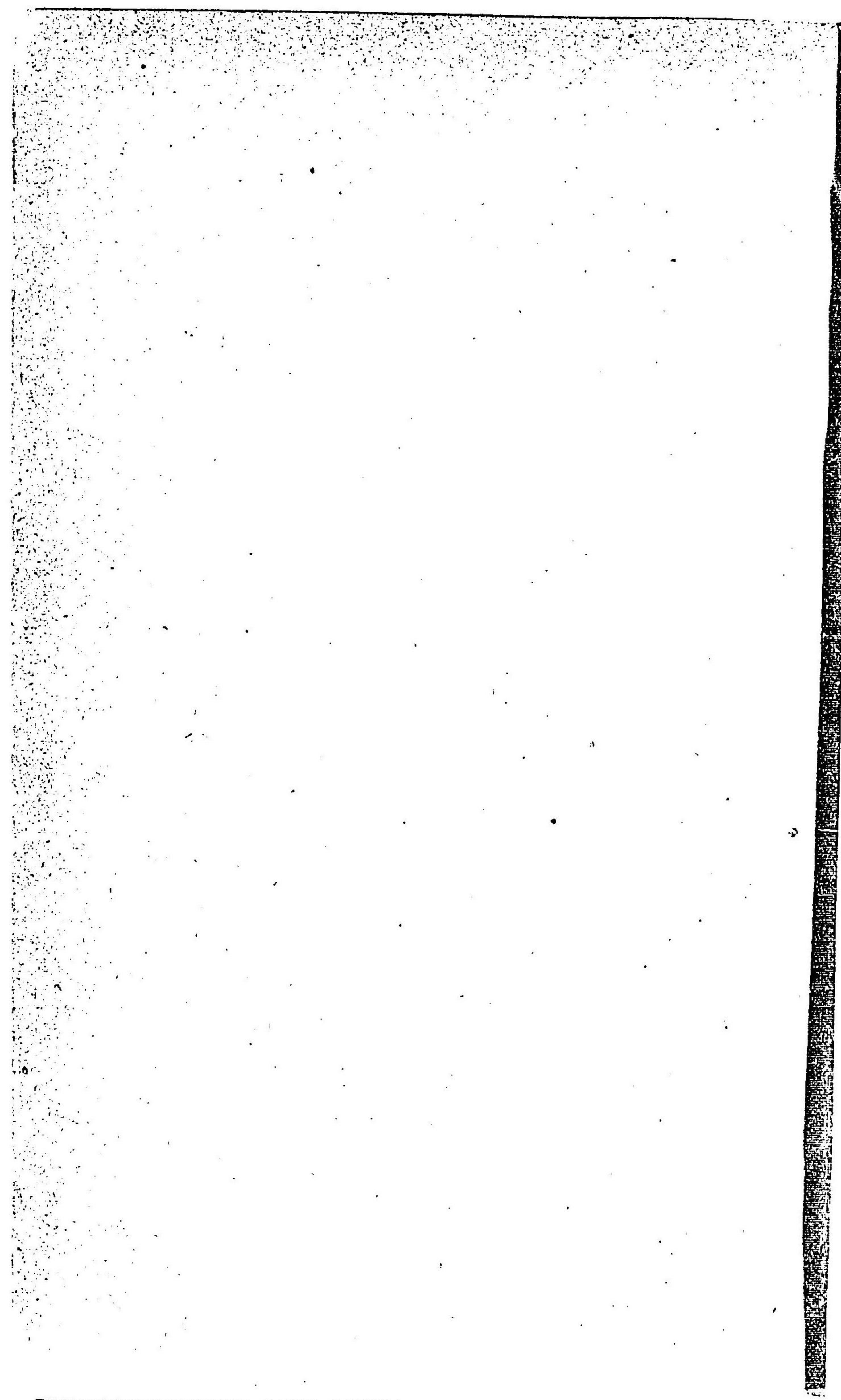
須藤靄山著

名主名家の夫人

東京 大學館 發行

十一





序

夫れ孟母が居を

三遷せしは、實に家庭薰育の忽にす

がらざるを知れ

ばなり、果せる哉、孟軻人と成て後、能く

聖賢の偉名を博す

是偏に孟母の教訓に由ればなり、梅

檀素の雙葉にして

香しと雖も、然も人の之を培ふなく

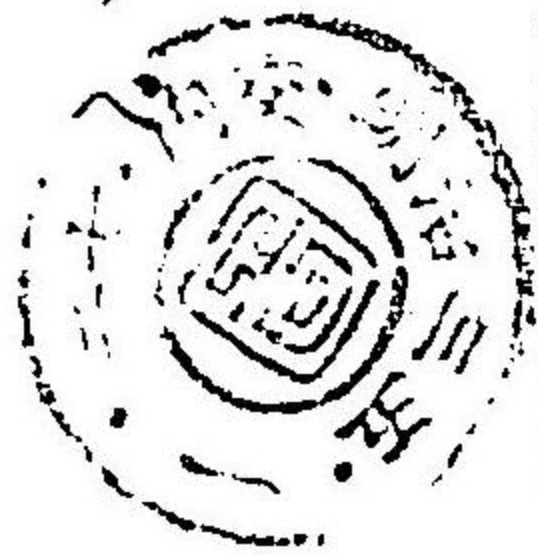
んは、以て天を衝くの高に至らんや、麻の内に生ずる蓬

は、助ずして直しと、然らば、則ち天真燦爛なる兒童を養

育し、處女を薰陶して、以て後年身を樹て、名を擧げ、父母

の家聲を顯し、其英譽を永く竹帛に垂るゝの傑士、才媛

と爲すは、是れ實に人の母たる者の務めなり、能く舅姑



に仕へて孝に、夫に見へて貞に、自家の繁を計り、出ては
國家に忠ならんを期すは、是れ人の妻たるものゝ勤め
なり。

皇祖國を肇めしより、爾來茲に星霜二千五百六十有餘
年。世は時勢と共に推移し、人智發達すると共に、之が裏
面に在ては道德廢頽し、仁義禮節衰微して、人情紙より
も薄く、淑信地を掃ふて益々其弊に流れんとす、才媛才
ありと雖も亦恃に足らず、美人美なりと雖も亦以て悅
ぶに足らんや、才媛才に誇りて災厄に陥り、美人美を銜
ふて禍害に遭ふ、看よ、小町が才も、其末路果して如何、淀

君が美も、亦其末路果して如何、今日あつて明日又頼に
足らず、古今の實歴觀來り察し來れば、人の妻たり、世の
母たるものゝ務も亦た難い哉。

然り、而して此せち辛き浮世に立ち、以て家を守り、子女
を育すは、如何にして可ならんや、之れ余輩が本書を著
す所以なり、渺々萬里の大洋を航するの船艦尙指針あ
り、轟々百里を走るの汽車、尙鐵軌あり、人の世に處する
亦其範鑑なかるべけんや、余茲に感あり、現代に於て苟
も名族傑士と稱する人物と聞閣、其數一百三十有餘を
網羅し、其美風高德を詳載す、世の母たるもの、人の妻た

るもの宜しく常に之を座右に誦讀して其貞徳に似へ、
然らば則ち世に處し家を理する豈難きにあらんや、今
や梓に上するに及び此を書して序に充つ。

四

明治三十四年十一月

日光の客舎に於て

著者識

目次

(一) 次 目

一條公爵と其夫人	一頁
徳川公爵と其夫人	二
土岐子爵と其夫人	三
山縣侯爵と其夫人	四
村田保と其夫人	五
伊藤侯爵と其夫人	六
星亨と其夫人	七
松浦伯爵と其夫人	九
稻葉子爵と其夫人	九
兩宮敬次郎と其夫人	一〇

德川義禮侯爵と其夫人……………二一

末松男爵と其夫人……………一三

齋藤修一郎と其夫人……………一四

嵯峨侯爵と其夫人……………一五

小金井博士と其夫人……………一五

長岡子爵と其夫人……………一六

津輕侯爵と其夫人……………一七

松下子爵と其母堂……………一九

谷中將と其夫人……………二〇

山脇玄と其夫人……………二一

鍋島侯爵と其夫人……………二三

土方伯爵と其夫人……………二四

大隈伯爵と其母堂……………二五

濱尾新と其夫人……………二五

柳原伯爵と其夫人……………二七

榎本子爵と其夫人……………二八

大山侯爵と其夫人……………二九

秋元子爵と其夫人……………三〇

板倉子爵と其夫人……………三〇

野田男爵と其夫人……………三一

戸田伯爵と其夫人……………三四

南部信榮侯爵と其夫人……………三五

鳩山博士と其夫人……………三六

坂谷長官と其母堂……………三七

片岡健吉と其夫人……………三八

岩崎彌之助と其夫人……………四三

柳澤伯爵と其夫人……………四四

本多子爵と其母堂……………四六

西郷南洲翁と其夫人……………四七

山田顯義伯爵と其夫人……………四八

佐竹侯爵と其祖母堂……………四九

阿部子爵と其夫人……………四九

栗生武右衛門と其夫人……………五〇

犬養毅と其夫人……………五二

野口小蘆女史……………五六

有馬伯爵と其夫人……………五七

尾崎學堂と其夫人……………五九

山川操子刀自……………六〇

京極子爵と其夫人……………六二

堀子爵と其夫人……………六二

福地櫻痴居士と其夫人……………六三

早川龍助と其夫人……………六五

穂積博士と其夫人……………六六

牧野貞寧子爵と其夫人……………六七

加藤子爵と其夫人……………六八

矢島かぢ子女史……………六八

恩地轍と其夫人……………七〇

毛利故公爵と其夫人……………七一

山室軍平と其夫人……………七二

高崎男爵と其夫人……………七二

税所敦子刀自……………七三

山口將軍と其夫人……………七五

志賀重昂と其夫人……………七六

黒田伯爵と其夫人……………七七

高梨代議士と其夫人……………七八

戸澤子爵と其母堂……………七九

上杉義順と其夫人……………七九

棚橋文學士と其母堂……………八〇

有尾敬重と其夫人……………八一

前島密と其夫人……………八三

栗塚省吾と其夫人……………八四

手島精一と其夫人……………八五

中島歌子刀自……………八六

金井之恭と其夫人……………八八

佐竹子爵と其夫人……………八九

村松しほ子……………九〇

杉山叙と其夫人……………九〇

兒玉少介と其夫人……………九一

跡見花蹊女史……………九二

高木總監と其夫人……………九四

西中將と其夫人……………九五

古莊嘉門と其夫人……………九七

藤堂伯爵と其夫人 九八

井田讓と其夫人 九九

滋野中將と其夫人 一〇〇

芹澤判事と其夫人 一〇一

宗伯爵と其夫人 一〇一

森子爵と其夫人 一〇三

長谷川泰と其夫人 一〇三

湯地大佐と其夫人 一〇四

井上伯爵と其夫人 一〇六

寺家村逸雅と其夫人 一〇六

織田子爵と其夫人 一〇七

京極子爵と其夫人 一〇八

黒木中將と其夫人 一〇八

後藤伯爵と其夫人 一一〇

河瀬秀治と其夫人 一一一

高橋健三と其夫人 一一一

神鞭知常と其夫人 一一三

大石正巳と其夫人 一一四

河野廣中と其夫人 一一五

菊池文相と其夫人 一一八

山田奠南と其夫人 一一八

伊藤芳次郎と其夫人 一二〇

清浦法相と其夫人 一二一

正親町伯爵と其夫人 一二二

平岡浩太郎と其夫人 一三二

富澤療と其夫人 一三四

岩倉公爵と其夫人 一三五

松平正直男と其夫人 一二五

大岡青造と其夫人 一二六

平田農相と其夫人 一二九

西郷侯爵と其夫人 一三〇

岩村定高と其夫人 一三一

元田肇と其夫人 一三三

中村元雄と其夫人 一三四

天野爲之と其夫人 一三五

高田慎藏と其夫人 一三六

三宅雪嶺と其夫人 一三七

田中正造と其夫人 一四一

青木子爵と其夫人 一四三

新井代議士と其夫人 一四四

佐々木伯爵と其夫人 一四六

有島武と其夫人 一四八

松平子爵と其母堂 一四九

久世子爵と其夫人 一五〇

田中子爵と其夫人 一五一

武富時敏と其夫人 一五二

井上勝之助と其夫人 一五五

星松三郎と其夫人 一五七

目次

吉田熹六と其夫人……………一五八

望月小太郎と其夫人……………一六〇

中久木信順と其夫人……………一六一

高谷佐平と其夫人……………一六二

堀越寛介と其夫人……………一六三

原亮三郎と其夫人……………一六七



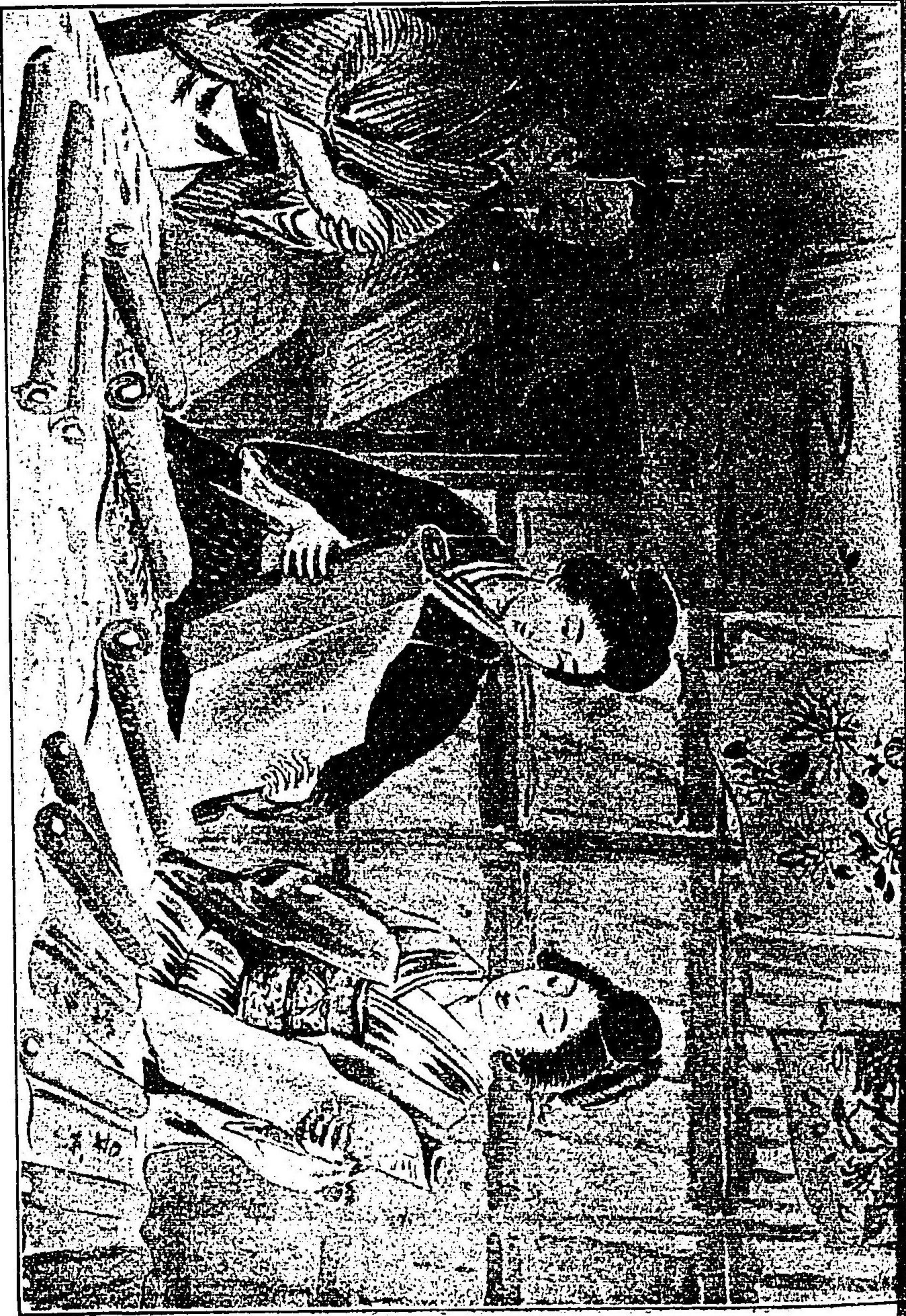
る途を汁器に伯上井人夫藤登 一第



第二圖 地人夫賊之圖



智頓の人夫莊古三第



謀 権 の 人 夫 權 高 四 第

名士名家の夫人

須藤 靄山 著

一條公爵と其夫人

公爵一條實輝君の令夫人は良子と稱す、御家附の媛にして畏も、皇后陛下の姉君に渡らせらる父君は一條忠香公と申す夫人は其御始の媛君なり、幼にして敏賢に弘く古今百科の書史に通曉し給ひ、英姿たをやかにして春の風に吹き残す、木の葉がくれの花かと疑はれ、柳眉麗はしくして秋の雲にかくれさしたる、村雨の晴間の月かと拜せらる、其御心の廣くして寛かなる洋々として漣靜かなる、長閑けき春の青海原の如く、其淑節清けくして彌尊きこと、千古の白雪を載て萬世其姿を變へざる、芙蓉の峯の大空にそびゆるが如し、實に現代に於ける貴族中其巨擘の閣閣とこそ申すべけれ、御

成長の後鳳鸞約なりて四條侯爵家より實輝公を迎へ以て夫君と定め給ふ、琴瑟相合し家庭よく和し、恰も在天の樂土に似たり、然るに天此良縁を忘れしか實輝公一昨年の秋頃より、風氣快ならず在ませしが次第に重きに渡らせられぬ、夫人此時に當て看慰最も力む、公が病篤き事遂に宮中に聞ゆるや、畏も十一月十六日 皇后陛下には一條邸へ御行啓あり親しく御見舞被遊、夫より名醫國手百方投薬に盡すと雖へども終に其効なく二十二日公三十二歳にじて鳳飛鸞分るの大悲となる、夫人號哭久うす、遂に櫃を品川東海寺に葬る、爾來夫人孤園を守りて、貞操凜然たること秋霜烈日の如く、公達媛君を教育し、以て其人となるを樂とせらるるといふ、實に近代稀なる秀園とこそ申すべけれ。

徳川公爵と其夫人

公爵徳川家達君は舊駿州静岡藩主文久三年七月を以て生る、徳川家の柱主にして明治

元年駿河國府中城封七十萬石を賜はり、同二年静岡縣知事に任ぜらる、夙に賢明にして英國に留學す君の令夫人は近衛公の妹君にしてよく父君の賢志を稟け、雲井に近き深窓の内在りて然もよく下情に御心を停められ、機絮養蠶の事を知し給ふと女人便へ聞けり、夫人名家に生れ人となり給ひしを以て心宥かにして博く、高くして秀でたる威風は麗はしく愛でたき眉宇の間に溢れ天晴令夫人たるの高所良質を完具し將に後年其偉名を傳せられんとしつゝあり、二十世紀貴族の閨閣中實に其第一流たるの巨擘たり。

土岐子爵と其夫人

正四位子爵土岐頼和君は舊上州沼田の城主にして三萬五千石を領す、父君は、土岐美濃守と稱し、舊伊勢桑名より入る、子爵の夫人は萬千子と稱し、舊丹波國笹山の城主正四位子爵松平信正君の令妹なり、夙に美人の名高く聰明にして頗る處世家治の道に

長け給ふとかや、邸は芝區高輪北町四十八番地にあり、御子三人御在す皆何れも好麗の由、夫人家庭を見る、寛嚴其宜敷を得、子に仕へて頗る貞操なり、又感慕すべき閨秀たるを失なはず。

山縣侯爵と其夫人

侯爵山縣有朋君の夫人を友子といふ、博學にして多識なり、風姿温良淑徳高くして能く日本婦人の真相を備へ、弘く交際場裡に入りて趨接應對に意を用ひ禮を守る嚴肅、侯を輔贊して内政其宜もきを謀り頗る裁縫の術に精じといふ、夫人亦義心俠志あり慈善公益の事に力を盡し財を別ちて之に寄せ、子弟を薫育して好く家庭の平和を維ぐ人皆夫人の徳に服せざるなし然も夫人之を誇るの迂をなさず、好専門を出でずと雖も爾來夫人が積善の餘慶は遂に世の知る處となる今代得易からざるの好夫人たり、古語に曰く桃李不言下自成蹊と夫人在焉。

村田保と其夫人

貴族院議員從三位勳三等村田保君の夫人は前の外務省書記官齋藤榮氏の長女なり、花顔優雅にして不羈嚴平人に阿ねらず、よく世の名士の間に入りて之を御す、曾て子の元老院議官たるの時一英國人あり、頗る和風に究むく自ら日本通と稱す、閣臣諸公の家に入入して歌留多、雙六の遊戯を爲す、老練驚くに堪へたり、知人皆其高慢なるを惡み之を挫かんとす、偶々夫人雜煮を作り英人を饗す、知人亦其席に在り、心私に思へらく好機失べからずとなく故に躊躇して箸を執らず英人の爲す處を覗ふ、英人亦執らず、知人依て右手を後に廻し、頭を繞らして箸を面側に出し餅を挾んで以て食す英人亦之に似ねんとして遂に誤つて餅を背に落し其マンテルを汚す、一座哄笑す、夫人之を見て大に某の缺禮を恕り其往來を絶つ、其奇行亦斯くの如し。

伊藤侯爵と其夫人

明治元勳の魁首正二位大勳位侯爵伊藤博文君は實に近代稀に見る處の偉傑にして之を
往古に求むるに豊太閤の唯僅に侯と相對するあるのみ、其成功其立身、眞に人臣の極
に達せんすとす、誰か又匹儔するを得ん哉、其天賦の英邁にして絶比なる、其敏賢にし
て拔群なる、事に際し、機に臨み、特得獨歩の慧智を以て縦横無盡の快腕を振ひ、朝
に樹ち野に下り、政となく、商となく、工となく、農となく、弘く國家の隆榮に献身
し、盡忠報國十年一日の如し、刻下名士人物を口にするもの何人も亦侯が名を賛せざ
るはなし、嗚呼又偉なるかな、而して侯が元勳として世に處せし其半世の隻手となり、
幫助して以て現位に到らしめし功は是實に君が令夫人に歸せざるを得ず、二十世紀
の今日宇内の閨秀其數蓋し又少しとせず、然れども能く貞操淑行の婦徳を完備し、眞
個現世の閨秀として其第一位に敬置すべきは、君の令夫人を推して其首となす、夫人

名をうめ子といふ、風丰高尙、舉止優雅にして頗る家政に心を用ひ又博く公共の事業
及び慈善仁徳を重んじ、喜施に財を投ずるを惜まず、常に婢僕を勞り以て美風に薰せ
しむ、故に下奴皆其高恩に懐き之に母事すといふ、亦以て夫人の徳の如何に篤きかを
窺ふに足らん、夫人又交際の術に長し内外貴顯の間に入出して天晴公の令夫人として
大に其重きを置かるゝ實に我國純美の好閨と稱すべし。

星亨と其夫人

星亨は現代稀れなる人物なりき君は自から東洋のシーザーを以て任じ、吾人又之を許
したり君は近來政黨の通弊と教育事業の不振を嘆じて自から其任に衝たり大に奔走努
力する所ありしに計らざりき六月二十一日東京市參事會場に於て刺客の爲めに斃れ
ぬ、君猶ほ齡五十有二而して素志の萬分の一を遂る能はずして遠逝不歸の客となりし
に至つては國家のため悲しまざるを得ざるなり未亡人都奈子は此兇變に接するや車

を馳せて市役所に至り星氏の遺骸取片付に關して指揮監督の任に當り且つ傍ら數百人の來吊者に對して一々叮嚀に挨拶して一滴の涙を洩さず斯くて伊藤侯西郷侯等の來訪に接するや端然正坐毫も亂れずに應接せしには一同感ぜざるものなかりしといふ夫人は江戸の人舊幕の御用達を勤めし伊阿彌駿河(一雄)の長女にして明治五年十七歳の時星家に嫁す享氏時に二十有三歳大藏省七等出仕たり夫人は江戸の町屋育ちなれば遊藝の嗜み淺からず後佛語を學び公使夫人として米國華盛頓に在留中は英語を修めぬ、漢學は勿論手跡は頗る達者なること人の能く知る所なり夫人は幾度か牢獄の辛酸を嘗め幾度か萬里の遠征を試み良人に事ふること茲に三十餘年に及ぶ星氏が世界に功名を馳する亦夫人内助の功與つて力あり殊に夫人は淑徳の聲高く清き家庭を有し博愛心に富むと云ふ、因に記す、夫人は良人の東京市に深き縁故を有したるに因り氏の遺産たる文庫凡そ價額萬餘圓のものを擧げて東京市に獻じて良人の意を明かにせりとぞ世に稀れなる淑徳の譽高き賢婦人にこそ。

松浦伯爵と其夫人

正三位伯爵松浦詮君は舊肥前國平戸の城主にして六萬千七百石を領せられ松浦肥前守の御胤なり、夫人は澄子と申す當年五十九歳に渡せらる、舊美濃國八幡の藩主青山家より入りて嫁す、英智にして世事に通じ家政を治むる極めて巧なり、夫人嫁してより、鸞鳳好く和し公達八人、姫君五人を擧げさせらる、何れも好姿賢美の聞あり、夫人の徳高くして能く子女を育養し大に心を盡す、實に好母堂たり、世間子なきをかこつ者ある中にさりとは又兒福なる哉、其家庭和氣藹々祥瑞邸内に普しとぞ。

稻葉子爵と其夫人

舊豊後國臼杵の城主五萬六千石故稻葉伊豫守久通君の夫人は御家附の姫君にして竹子と申す六十一歳なり、徳操堅固にして心廣く寛かにして温厚なり、嫁してより能く夫

君に仕へ内政其宜敷を致せしが去る明治二十六年久通君には二豎の襲ふ處となる、夫
人常に枕頭に附して衣帯を解かず、日夜看護に盡す、近人其自體の勞れん事を諫むと
雖も聞かず、慰療最も力む、然るに藥石遂に其効を奏さず五十二歳を以て逝去す、夫
人夫より身を閑暇の間に置く、長子、順通君家督を繼ぎ麻布飯倉片町六丁目十三番地
の邸に在り。

雨宮敬次郎と其夫人

雨宮敬次郎君の商界に賞揚せらるるは吾人の已に知る處なり、君が徒手克く今日巨萬
の富を致せし其以前赤手郷を出で後四方に流寓し、驚天動地の大計畫幾度か失敗に
失敗を重ね、赤貧洗ふが如く、明日の糊口に尙困却する期に當り夫人千辛萬苦克く夫
を助け辛ふじて下宿業を營み以て其日の活計を立てつゝある時、毎朝日未だ昇らざる
に先ち起き出で嚴寒肌を裂くの冬、氷を碎て洗濯をなし、客の靴下僅に一足一錢づ

とを以て洗ひ賃とし而して其得たる處を糊口の資に補ひ克く君が半生涯となり半身と
なり、嫁してより十年一日の如く赤誠若に仕へ今尙變らず氏を助け今日あるを致せし
もの、堅忍夫人の如きは實に稀に見る處なり、世の人君を評すると同時に又此夫人信
子の偉功を忘るべからず、之れ實に吾人が茲に其操行を記し以て世の母たり人の妻た
るものゝ爲め、其貞節を彰發して躊躇せざる處、其困苦僅に餘命を保ちてあるの間に
在つて、力めて内助來應し、夫唱婦從的協相一致克く君をして好機一世にして商業界
の快男兒、企業界の好運兒として其名聲を博せしむるに至らしむ、嗚呼明治の昭代人
の妻なるもの其萬幾億、然も其貞堅烈操斯の如き閨閨は夫れ幾人かある、蓋し曉星よ
り妙なからん乎。

徳川義禮侯爵と其夫人

徳川義禮侯の令夫人は舊尾州の城主故徳川慶勝君の次姫なり、少にして母公貞鏡院の

薫育を受け、後義禮侯に嫁す、侯は素と高松家の公達にして出で、徳川の家を嗣ぐ、往年侯欧州を歴遊し歸朝後素行稍や修らず、朝に柳橋にも云ふ花を愛し夕は新橋に笑ふの月を弄す、夫人憂慮孤閨に熱淚數行幽々として夢を騒がせしも、曾て顔に怨の色を現さず、厚く母公を慰め克く下婢奴僕を憐み、相戒めて以て侯が過態を人に知らしめず、日夜辭を盡して悔善を勸む時に侯近親の目する所となり、遂に離縁の議起る、一門の舊臣確執相敵視し、紛蹂百論争議最も極む、侯之を觀て身を名古屋に避けて閉居す、夫人之を聞き悲歎涙を瀧下して曰く、妾の君に嫁するや已に苦樂相俱にせんを期す、君今や名古屋に在り、朝夕の料果して如何妾獨り華樓に停て美食に飽くは肯とせざる所なりとて、屢く侯が歸邸を促す切なりと雖も、侯又事局未だ靜らざるを知り歸らず、夫人乃ち之を傍觀するに堪へず、起て輕裝數婢を携へ微行名古屋に至り親ら君の爲めに薪水の勞を執り血淚涕泣大に君を諫め以て速に家難の解けなん事を望む、居る事少時、人皆夫人の高徳に感じ遂に紛議圓滿局を結ぶに至る、實に夫人

の高徳至大なりと云ふべし、世の貞操を云ふもの必ず指は夫人に屈せざるはなし、亦偉なる哉。

末松男爵と其夫人

前内臣大臣文學博士男爵末松謙澄君の夫人は伊藤博文侯の女にして名を生子といふ、天資活達英敏にして淑徳高く、夙に泰西の學を好み、華族女學校に入るや、秀才衆に超へ其名校内に稱せらる業を卒へて末松氏に嫁す、能く英佛の語に巧にして人に接する其上下を隔てず、常に貴族の間に出入して交際社會に貴重せらる、亦内政に長じて歐米の風習を愛し、男に奉仕して鸞鳳琴瑟相和して家庭靄々たり、男の累進して終に男爵を授けられ華族に列せらるゝに至りし所以のもの、亦夫人常に内に在つてよく夫君を幫助せし効與つて力なしとせず、實に今代の好夫人たり。

齋藤修一郎と其夫人

東京米穀取引所理事長齋藤修一郎君の夫人は府下某材木商の女なり、不羈にして落
なり、律直人に阿諛を呈するを好まず、氏に嫁してより淑徳頗る堅し、氏曾て農商
務書記官として井上伯の内閣に仕す、時に偶々夜會あり、貴閨令媛群參す、伯亦其の
内に在り、諧謔よく婦女子と戯れ嬌辭其缺點をなす、閨媛爲めに赧然袖屏風を作るも
のあり、已にして人散じ、會了るの後、伯又夫人に向つて戲笑大に冷評を下す、語辭
頗る滑稽なり、夫人之を聞て伯を睨み、忽ち身を躍らして遂に伯を倒し傍らの墨筆を
執り伯の面を塗り、哄笑一番伯にして冷評を止めずんば尙之を塗らんと、伯亦避退し
て去る、夫人の洒落皆斯の如し然れども家庭を處する頗る嚴、皆其徳に服す。

嵯峨侯爵と其夫人

從四位侯爵嵯峨公勝君の夫人は仲子の方と稱す、御齡三十七歳に渡せられ從四位中山
忠光君の長姫なり、現侯爵中山孝麻呂君の御同胞にして一位の局の令姫に渡せらる、
夫人の御生家は昔時正親町三條と申し禁裡に近く奉仕せしなり、夫人侯に嫁してより、
鴛鴦相親しく、公達四人、姫君二方あり今や教育に心を盡しつゝ、下谷區二長町五十
二番地の邸にあり、一家和合して風波なく、其淑徳よく下人に及ぼし皆之に母事すと
いふ、東宮太夫の孝麻呂侯の御連技として世に愧ぢざる、好聞たり。

小金井博士と其夫人

醫學博士小金井良精氏は東京醫科大學の教授をして其性實直精勵家を以て名あり、君
又解剖學に長じ田口博士と共に海外に其名を知らる、夫人君子は醫學博士として一面

には文學者を以て有名なる鴈外森林太郎氏の令妹なり、夫人は外國語に通じ殊に英會話に至りては殆んど外人と句調に於て異なる所なし、其外國文學の翻譯の如きは我國人中に於ても其特長として數へらる、内に在つては克く良人を助け學事上夫人の便宜を假ること度々なりしと云ふ外に在つては交際を知る内外全きを得て遺憾なしとす蓋し夫人の如きは世に又稀有にして後世賢母の龜鑑たるべし。

長岡子爵と其夫人

正三位勳二等錦鷄間祇候子爵長岡護美君は夙に泰西の學に志を抱き維新の後歐米各國を歴遊し、名士大家に就て學を修む、明治の始め參與職となる、後に侍從に進み特命全權公使として和蘭へ駐劄す、歸朝後現職に累進し貴族院議員たり、君の夫人は天資温雅順良にして貞操あり、君の海外に在るや克く内政を整理し以て其全を計り、弘く名士政客の間に出入し時勢を評論す、其才藻の富贍なる有鬚男子をして正に墜着たりしむ、實に近代の閨秀を擧げて指を屈せば必ずや夫人亦其の内在りて洩れず。

津輕侯爵と其夫人

從二位侯爵津輕承昭君は舊奥州津輕の藩主なり、夫人を尹子と云ふ、故從一位近衛忠熙公の令媛にして今の貴族院議長公爵近衛篤磨君の伯母君に當る、公は素と細川家の出にして入りて津輕を嗣ぐ、夫人嫁してより鴛鴦能く親愛し、天晴名族の令閨として世に愧ぢざる德行あり、人に接して驕らず、謙遜寧讓を以て自ら任じ、明治八年姫理喜子を生む、理喜子又天資機敏にして學事に志篤く明治十三年六歳にして本所區小泉町公立小學校へ入學し、同二十一年全科を卒へられ進で高等女學校に入り二十三年轉じて東京女學館に入る、頗る博藝の名あり、琴を九子壽子に習ひ、畫を水澤續子に修め、插花は松浦藤子に従ひ皆其妙を極む、又和歌は鶴久子に就て其奧秘を得知し佳咏亦多し、今二三を記さん。

○新年祝賀

しろしめす八洲の外に住む民も

君をこそほぐ年立にけり

○郭公幽

雲間ゆく片われ月の影更けて

かすかにをのる山時鳥

○庭前竹

かげ高く生伸びにけり去年我と

たけくらべせし庭の若竹

理喜子亦才媛たるに愧ぢず、本年芳紀正に二十七歳是より先き風鸞約なり、理喜子近衛篤磨公の令弟英磨君に配せらる、英磨君は現時獨逸に留學中歸朝後理喜子を迎へて盛に華燭の典を擧げられんとする由、理喜子亦多幸と謂ふべし、願くば益々其貞徳を

高うし後年家を爲せしの後、よく好聞たるの名聲を博せられよ。

松平子爵と其母堂

子爵故松平直致君は舊藩州明石の城主松平兵部大輔の長子なり、夫人は静子の方と稱し、舊攝州岸和田の城主岡部長矩君の令妹に渡せらる、天資温雅にして學識人に秀づと雖も人に驕らず、子に嫁してより益々堅貞の聞えあり、子に仕へて淑徳なり、然るに情天何等の不幸を來せしむ、直致君には去る明治十七年六月二十八日三十六歳を一

期として逝去せられぬ、夫人之より身を退き家督を家弟直徳君に譲りて今尙芝區高輪

北町四十八番地の邸に在り、日夜夫君が靈魂を吊ひ其冥福を祈りつゝありといふ。

子爵谷中將と其夫人

子爵谷中將の勇名世に高きは皆人の知る處、而して子をして此英聲を博する地位に至らしめしは夫人の力亦與て少しとせず、夫人名を玖満子と稱す、父は土佐の藩士にして祿二百石を食む、弘化元年夫人の生るゝや薰育最も力む、然れば夫人幼にして學徳兼ね備り藩中皆其拔群を讃む、故に高臣の之を迎へんとするもの頗る多し、時に谷子は藩の輕臣にして僅に五人扶持に過ぎず、然りと雖も君が凌みたるの氣骨は已に此時より凡に秀で人にて有爲の士となす、父君乃ち夫人をして子に嫁せしむ、此時に當り子の家政大に宜しきを缺き朝夕糊口の料又意の如くならず、茲に於てか夫人自ら木綿の鯉口を裁し之を着し朝に霜を碎き巷市に出で馬糞を拾ひ、夕に月を踏んで家に歸り、深夜尙草鞋を作りて以て自ら之を市に鬻ぎ、力を盡し家政の裕かならんを計る、後數年遂に子維新の風雲に際し、身を兵馬の間に投ず明治十年西南の變あるや、已に

陸軍少將に累進し、熊本城に長たり、賊將桐野、篠原、を主とし雲霞押し來りて城を圍む、子城中に在りて防戰賊を破る事多しと雖も賊兵尙退かず、城兵孤軍糧食充らず、粟粥を食して飢を凌ぐ、此時に當り夫人飛丸蝗の如きの間に在つて好く炊事に盡し、大に將士を勵ます、後亂平らぐるも夫人の行爲尙其昔を忘れず、質素綿服を着し自ら厨事に従ふとかや、往年故北白河の宮殿下子の邸に臨幸するや、夫人先の鯉口を着し其昔時の辛酸を語る一座皆感涕せしとぞ、實に當代得難きの夫人なり。

山脇玄と其夫人

行政裁判所評定官正四位勳三等山脇玄君は舊福井藩の士族なり、其初めて現世の空氣を呼吸せしは嘉永二年三月にして恰も米國水師提督ペルリの黒船浦賀に來つて國內騷然たりし内に人となる、君資性頗る賢忍、苦學好く其奥を極むるを務とす、君嘗て獨逸へ留學仰付られ彼地に於て其志す處を修め以て歸朝せり、明治十一年司法省御

用掛を拜命せしを抑も官海に入りし始めとす、夫れより参事院議官法制局参事官同局部長等の職に累進して明治二十四年十二月二十二日遂に貴族院議員に就撰せらるゝに至りぬ、君の夫人はふさ子といふ、英才にして學識あり、亦慈善心に富み喜捨に財をなげうつを惜まず、以て婦人の淑徳勲に盡し、最も心を用ひて鳩山夫人、未松夫人、津田梅子等と共に互に相往來し、時々演説に或は雜誌に其平常論唱する處の意見を發表して盛んに現時我國巾幗界の道徳衰頽を嘆じ其快復を計りつゝあり、夫人又常に支氏を補助し君が政務の爲め家政を見る事難きの時に當つて克く自ら其内政の局に當て冗費を省て以て餘裕を作る、其妙手又驚くに絶へたり、現下世の論者苟も其闊秀を論ずるもの必ずや其話頭を此夫人に至らしめざるはなし、之實に夫人が閨秀中の闊秀たるを證して餘りあると云ふべき乎。

鍋島侯爵と其夫人

我國華胄の名族、鍋島侯の名は、特に江湖に知れつゝあり、侯は素と肥前國佐賀の藩主にして、維新の改革より、降りて明治十三年、全權公使として伊太利に駐劄し、同十五年歸朝してより以來、宮中に奉仕して今や宮中顧問官の榮職にあり、而して當時所謂大名風を止めて、自ら交際場裡に出入するの婦人、未だ多からざる時代に於て、燦然人目を射る令夫人と云はば世人は先づ冒頭第一指を鍋島侯夫人榮子の方に屈するなるべし、夫人は故正二位廣橋胤保君の姫にして京都に生れ給ひ、御年四歳の時より今に至る迄、常に宮中に入出して、兩陛下の御思召最も愛度し、夫人徳高く和歌に秀で書は千陰流を汲んで頗る美事なり、又夙に公共の事業に身を盡されつ、現に大日本女學會を始め幾多の會に於て敬重せらる、夫人内に在つては教育に力を致し、十有餘人の(先夫人のとも)息姫の爲めに教師兩名を雇ひ、又外に在つては伊太利風の交際

上手を以て名あり、眞に貴婦人世界の龜鑑と爲すに足るの閑閑は正に榮子夫人を推す可し。

土方伯爵と其夫人

前宮内大臣伯爵土方久元君の夫人はかめ子といふ幼にして英秀郷黨皆其智に驚く、夙に和漢泰西の學に志し深く、弘く諸子百家の經書に曉通す、鸞鳳約なり土方子の聞となるや能く子に仕へて聖經賢傳之を躬に行ひ孝義貞操愈々堅し、常によく家政を整理し、子弟を育する嚴然品行方正にして奴婢皆夫人に母事す、身亦宮内大臣夫人として毎に高貴雲井に近きの間往來し、交際場裡最も重を置かる、子往年宮相の位置に在り政務公用多きに際し、常に内顧の憂なからしめし的美績は皆能く人の知る處、今や上流社會に於て學徳並び備るの好閨、又かめ子夫人を除きて多く其伯仲を見ず。

大隈伯爵と其母堂

伯爵大隈重信君の母堂は夙に貞淑の聞へあり伯の若かりし時父君没す、爾來積年力めて伯の養育に盡くす、伯の會て江戸に赴かんとするや、偶々獲中大に乏し、時に之を母堂に訴ふ、母公即ち君を訓し秘する處の黄金百兩を出し以て其費に充つ、伯之を得て上京し、維新の間遂に風雲の好機に會して能く今日あるに至らしめしもの實に母堂が平常の教訓よるしきを得たればなり、母堂老後佛教に心を寄せ以て將來の冥福を祈りつゝありといふ。

濱尾新と其夫人

濱尾新君は舊豊岡藩士嘉永二年四月を以て生る、今や正三位勳三等に榮進し前帝國大學總長として或は文部大臣として一方面に向て非常なる勢力と信用とを持得せし人物

なり、君が文部省に出仕し南校監事を拜命せしは實に明治五年なりき、夫より文部少書記官となり、大書記官となり、参事官となり、帝國大學總長となり、遂に文部大臣に累進す、君亦明治二十三年勅選せられて貴族院議員に列せらる、其文部部内に於て重きを置かるゝ又此の事歴による君が官海に浮泳して克く其位置に倚り獨特の敏腕を揮うて進行するは、其黒幕否其顧問として實に君が夫人の献策あるが故なり、夫人名をさく子と稱す、淑徳の心篤く克く君を幫助して盡す處あり、十年殆んど一日の如し、近くは伊藤内閣倒れて桂新内閣の組織せらるゝや、濱尾氏は文部大臣として擬せられしなり、君は勸告に向つて専ら入閣せんと決心せしが、夫人之を耳にし大に君に忠陳し、其意見を呈して曰く之れ甚だ不可にして策の得たるものに非ず、今日の内閣は實に卿が輕卒なり殊に近來内閣の變動甚だしくして恰も天候の定らざるが如く、朝に風となり夕に雨となり、一度夜明けては直に晴天となるに似たり、今や組織せらるべき内閣の壽命も亦期して知るべきのみ然るに君一時の榮譽に甘んじ之を恃んで入

閣するが如きは策の上乗に非らずと、君之を聞て遂に斷念す、夫人の機智又的中するや否や。

神原伯爵と其夫人

舊越後高田藩主神原伯爵の夫人は舊加州金澤の藩主前田侯の令媛なり、夫人の生家は頗る大藩なるを以て夫人入輿の際四時の衣裳置に満ち車輛數十整々として贈る、器具皆を染むるに梅鉢の家紋を以てす、夫人豫め之をしらず其陳列するを見るに及んで始めて之を識り侍女に語つて曰く「身父母の膝下を去つて人の妻となるや、また再還を期せず、夫君の家を以て己の家となす、今携ふ處の器物皆梅鉢を紋す、是れ乃ち他家の紋章たり、之を附する不倫心に安んずる能はず」と命じて之を悉く抹除せむ、家人之を聞き皆賞す夫人資性温篤下に慈にして上を敬ひ、名族を肩にして人に驕らず常に親ら起つて客に接するといふ、今や不歸の人となる。

榎本子爵と其夫人

子爵榎本武揚氏の夫人は海軍少将總監林紀先生の女にして名をたづ子といふ、夙に詩文に能を得、子の會て特命全權公使となりて魯都に駐劄するや、夫人孤閨を守りて東京に在り、子の心を相思ふ切なり、遙かに詩を寄せて曰く、

誠君勿耽花月夜、濃花朗月屬多情。

誠君勿耽歌舞宴、遊冶畢竟誤一生。

妾身當要閨中節、君身須期海外名。

君不見功烈拿破崙、席三卷歐洲唱文明。

又不見偉勳豐太閤、振三起皇威禽虜兵。

由來丈夫皆如此、天下何事豈難成。

七砲臺邊浪萬里、帆檣影裏月三更。

一對欲寄相思語、淚落枕頭靜有聲。

と其高韻掬すべし、夫人幕末兵馬の間に人となり、能く學に志して此譜を作る、又篤行ありて温順、實に日本固有の良閨と云ふべき乎。

大山侯爵と其夫人

參謀總長陸軍大將侯爵大山巖君の令夫人は陸軍中將山川浩氏の妹にして名を捨松といふ、天資聰明一を聞て千を知るの才あり、宣教師に従ふて米國に遊學す、時に年漸く十六、海外に在るの間よく彼地風物の實狀を見、酷苦泰西の學を修め素志を練り、居る事多時、學成つて歸朝するや、日本婦人の徳育全からざるを歎じ、上下東西に論唱して其改善を計る、後鳳鸞約成り遂に侯に嫁す、素行常に洋風を賞し、徳操世人の稱賛する處となる、家庭を理する又妙巧實に西洋的好夫人たり。

秋元子爵と其夫人

正四位子爵秋元興朝君は舊上州館林の城主にして六萬石を領し秋元但馬守と稱せられし人なり、夫人は舊奥州南部の城主今の伯爵南部利恭君の令妹に渡らせられ宗子の方と稱す、芳紀正に三十七歳と承はる性敏慧にして諸氏百科東西の學に秀で、其機智才操の富贍なる有鬚男子も亦瞠着たらしむるとかや、歸でより以來君を幫助して一意専心家名の擴張に盡し、内政出納の局を治めて最も其巧を妙手に現はす、其子弟を教育するや、勉めて其善良嚴肅を期し然も愛慈を旨とす、家庭相和して夫人の徳能く蕭牆の中を治め、芳聲籍甚人をして轉た其風に服せしむるものあり。

板倉子爵と其夫人

子爵板倉勝弼君は板倉内膳正勝重公の遠孫にして板倉周防守の御嗣子備中に於て二萬

石の城主たり、夫人は清子の方と稱し舊上總松尾の藩主今の子爵太田資義君の家より入る嫁してより以來御中頗る親しくして御子四人を擧げされらる明治二十二年御長子勝貞君家を嗣で本郷區湯島天神町三丁目三番地の邸に在り、夫人今年壽齡五十三歳に渡せらるると雖もよく家政を補佐して大に力を繁榮に盡す、貞徳堅固會て驕色なく人に接して頗る謙讓功を良人に婦し以て得々たり、比隣皆其徳を稱す。

野田男爵と其夫人

前陸軍省經理局長たりし男爵野田豁通君は實に余輩が最も其徳風に敬慕する、明治時代に於ける清廉君子の巨璧なり、君は元來質性磊落にして奇偉然も真正潔直の士、而して其一度公務の局に當つては縦横無盡、敏腕健手を揮ふて事を理し、下僚を率ゐて之を處し、迅速活達加ふるに其注意周到なるに至つては吾人亦敬服するの外なし、余輩は君が去る二十七八年戰役に於て君が出征中の軍陣日記を見しが、實に其精密に

して明細なる克く砲彈降雨、硝煙暗膽たる千軍萬馬の間に在つて、此記事を爲せしか
と想像せば、層一層、其勇膽の剛豪にして沈毅なるに驚かざるを得ず、君は平和の後、
克く經理の局に在つて陸軍部内の財政を井然たらしめ、而して其職を辭さんとせしが、
君が健腕何んぞ世人その隱退を喜ばんや、幾度か優渥なる諫止の爲め遂に今日に至り
しが、今や遺骸を乞ふて閑地に身を置く事となりぬ、實に君は石黒翁と共に、圓滿辭
職の雙璧なり、君が高風を賞すると同時に余輩は茲に特筆大書以て世人に知らしめん
と欲する事あり、そは他ならんや、實に君が令閨の淑徳なり、抑も世に令夫人と稱せ
られてある、閨閣は、多く深窓の裏に閑居し、出でず世人と交りをなさず、家人近親
の外亦他を語らず、侍人知己に非らざれば以て面を掩うて之に接せず、自ら避けて世
に遠からん事を是れ好むは、實に我國古來の舊習幣風にして、此惡習たるや、上流に
廻るに従ひ益々其度を高め、世間に其顔をさへ識られざるを以て、其最も淑徳の高
きものと誤解し、自ら居して嬉ぶものも如し、維新改革の一舉遂に克く此幣俗を改新

せじが如きと雖も、然も未だ貴顯名閨と稱する者の閨閣にして、尙此の流に従ふ者
少しとせず、豈痛歎の至ならずや。
此現下の間に在つて克く時風の倡首となり、奮然自ら進んで世の模範に任じ、婦女嬌
風の鑑鑑となり、廣く社會公共の事業に卒先力を盡し、私財を抛つて之が奨勵を計
りつゝある、英徳君が令夫人の如き夫れ古今を通じて國の東西を貫て又幾人かある、
實に我國巾幗界中の泰斗と稱すべし、夫人名は住子と云ひ天資英敏、明賢にして淑徳
貞操高く又堅し、内ちに在つては克く君を助けて家政を全うし、出でずは慈善に、教
育に、上下を問はず、貴賤を隔てず、弘く何人をも信愛し、博徳献貢、孜孜として尙
ほ及ばざらんを恐るゝ、尙風夫人の如きに至ては實に其徳に浴し感極つて哭するもの
もある又所以なきにあらざるなり、世の閨室たる婦人、志士の妻たる者、宜しく夫人
が此美行に則り以て偉名を竹帛に垂るゝを期せ。

戸田伯爵と其夫人

舊美濃國大垣の城主十萬石を領せられ現諸陵頭式部次長主獵官正三位勳二等伯爵戸田氏共君の令夫人は極子の方と申す、今年四十五歳に渡せられ、贈太政大臣故岩倉具視公の長めの媛なり御風姿婉麗人にすぐれて、斐翠の釵たをやかにして青柳の風に動くが如く、遠山の黛うるはしくして、蒼蛾の雲にあがるに似たり、明治の時代美人其數蓋し億のみならず、博識内侍式部を歴し、嬋妍、勾當小町を凌ぐはあれども能く其の淑徳を備へて眞固の鬪秀と稱すべきもの甚だ妙なし、此群鷄中に在つて隻鶴とも謂つべきは蓋し夫人を措て他に多く其匹儔を見ず、實に故公が名令媛たるに愧ぢずとこそ云ふべけれ、夫人夙に泰西の學に志深くして好く英佛の語に巧になり嘗て伯の特命全權公使として、埃國に在るや、廣く外賓の間に入りて其名聲重をなし日本婦人の徳操を擧ぐ、往年舞踏の盛なるや夫人亦之を習ひ當時鹿鳴館中熱達の評高し、伯の歸

朝して現職に上るや夫人常に雲井に近く出入し交際場裡の花と稱せらる、夫人伯を補贊して内政其宜敷を計り、能く子弟を愛育して怠る事なし、伯にして此夫人ある實に好偶と稱すべき也。

南部信榮侯爵と其夫人

舊八戸藩主南部信榮君の夫人は鹿子といふ、舊盛岡藩主南部利嗣君の第二の媛にして華頂宮博恭王の御生母郁子殿下の令妹なり、素と信榮氏は島津家の出にして本性に非ず、故を以て家繼の絶なん事を慮り、鹿子を迎へて之に配す、夫人慶應の末出で八戸の邸に養はる、信榮氏の殿君信順氏は多年不起の病に罹る夫人孝養大に力む、明治の初年婚期に達して遂に合套の禮を挙げしも、信榮氏米國に留學する事二年大忠を得て歸朝し藥石其効なく惜い哉不歸の客となる、夫人哀悲寢食を廢す、爾來孤閨貞操を守つて十年一日の如く、令弟利克氏に其家督を譲り退いて氏の冥福を祈りつゝあ

る。55。

鳩山博士と其夫人

法界の泰斗衆議院議員法學博士鳩山和夫君の夫人名を春子と云ふ、性活達聰明にして能く處世の事を断じ、夙に和洋古今の學に志して皆其濫與を極む後聘せられて女學校の教師となる、曾て抜でられて歐米留學の内命に接せしも成家の機運るを以て遂に之を果さず、時人春子の賢才を稱し婚を求むる者頗る多し、此時に當りて、渡邊國武鳩山和夫の二氏最も良人の候補者なり、夫人亦見る處ありて鳩山氏と婚す、氏に仕へてよく内政を助け又交際に巧なり、君の代議士として其撰を争ふや、有志の間に説いて其當擢を致さしめたるもの蓋夫人の力多きに因る方今貴夫人社會春子夫人を以て其才を推して隨一となす。

坂谷長官と其母堂

大藏省總務長官坂谷芳郎君の夫人は男爵濫澤榮一氏の令嬢なり、資性聰明學識博く氏に仕へて貞操よく一家の内政を助け淑徳よく奴婢に及ぶ、母堂に仕かへて極めて孝なり、母堂は備中七日市の産名を京子といふ、天資英邁和漢百科の學に精通す而も謙讓嘗て人にほこることなし、藩士故坂谷希八郎氏に嫁して四子あり、長子は禮之助次を次雄、辰三郎といふ、芳郎氏は其末弟なり、嚴君はもと藩の儒者にして弘城館の師となり號を朗廬と云ふ、名望藩内に高し、母堂嫁してより自ら箕箒を執り薪水の勞を勤む、側ら夫君を助けて子弟の董育に盡し、よく蕭牆の内を治め芳聲人をして轉た其徳風に服せしむ、往年地方凶作あり五穀登らず、藩士皆其冗費を省き質約を旨とす、夫君故に倣ふて養ふ處の子弟を減せんとす、夫人百方其不可を説き諫請最も務む、自ら餘服笄玉を賣つて其費を助け朝夕儉節を主として家庭嚴正奴婢を戒めて内

政頗る擧る、夫人性勇邁磊落にして力量あり、盛時よく五斗俵を提げしと云ふ、芳郎氏の頃日柱内閣の成立するや、累進主計局長より遂に其總務長官となり省中に健腕を賞せらるゝに至し、所以のもの亦母堂平常の薰陶宜しきを得しものと云ふべし、孟母の賢尚母堂に匹儔せずといふも可なり、老に及んで益々聲徳比隣に高し、亦當代の好母堂たるに愧ぢず。

片岡健吉の其夫人

人物とは何の謂う、博學多才智能萬人に卓絶するの謂乎、曰く未可なり、克く世務に曉通し百般の事業を操縦するの謂乎、曰く未可なり、如何となれば學識博英、才畧壯量なりとも、苟も世務を知らざれば、是れ腐儒たるを免れざればなり、亦世務處辨に活通し、敏腕衆に秀づと雖も、苟も學識備らざれば何ぞ以て世に出で獨立特行名を竹帛に垂るゝの榮を得ん哉、然ば則ち才學實力兼備り之に據て以て克く一世の大偉業

を奏する者にして始めて人物と呼び偉傑と稱するを得べきなり、抑も立憲政體に則り以て國を治め民を撫する我帝國の政界に在つて、苟も人物の稱を呈するもの又幾人かある、吾人は茲に片岡健吉君を推して二十世紀初年に於ける其一人と爲す。君は天保十四年十二月二十六日を以て高知縣土佐國中島町九十八番邸に生る、幼にして英邁敏慧、夙に蓋天の大抱負を懷て、郷關に人と爲る、長ずるに及びて武事に志し、又閑を以て文を修め、其奥を極めて出藍の名あり、郷黨皆以て異數と爲す、文久三年二月擢んでられて土佐、長岡、吾川三郡の奉行に擧げられ、献身専ら海防の事を司る、尋で又士族隊長に進み、大に郷民の治政撫育に力を盡す、降りて明治元年戊辰東征の役起るや、君藩兵の大軍監となり、役を以て參謀を務む、兵を督して東山道より進撃し、各所に戰闘し至る處に軍功あり、同年九月君部下を率ゐて若松城に向ひ、奇策奏功、遂に城を陥れて、其十月土佐に凱旋す、威名四隣に赫々たり、藩公君が軍功を嘉し、特別に破格の拔擢を以て一躍中老格に昇進せしめ加ふるに、賞典祿二百石を賜はる、同年十

一月藩の軍務局參謀に補せられ、翌二年十月薩長土三藩相議して藩の兵士を上京せしめて、禁内の御親兵と爲さんとするの舉あるや、君拔んでられ權大參事となり、主公の命を奉じて大任を雙肩に負ひ、隊を率て途に上り、京師に入りて自ら兵を指揮して天覽に供す、同四年四月太政官の旨示により海外視察を命ぜられ米國を経て大西洋を横斷し、航して英京ロンドンに至り留る事年餘、深く泰西各國の兵制を洞察し大に啓發する處あり、歸途佛國に向ひ首都巴里を経て翌六年一月歸朝す、此年十月式部寮に於て海軍中佐に任せられ拔んでられて水兵本部課長心得を命ぜらる、次で七年一月征韓の論起るや、君亦大に其私見を主唱せしが、遂に其破裂するに及び故西郷南洲等と共に冠を掛け袖を連ねて京を去り故山高知に歸る、同年四月有志と俱に四方に同情の名士を募り、相謀りて立志社と稱する政社を創設す君衆の擧ぐる處となりて其長に推され自ら牛耳を執て、操觚に従ふ明治十年六月立志社を代表して民選議院新設開始の件を

具し建白書を京都市行在所に捧呈す、此時に當り西郷隆盛鹿兒島校徒の推す處となり、兵を擧げて官軍に抗す、君亦之に連座し翌十一年八月囚はれて遂に禁獄百日の刑に至せらるるに至る、明治十二年四月君郷黨の推すに従ひ選ばれて土佐郡より出で高知縣に會議員となる、是縣會開設の最初にして君が再び政界に其驥足を伸す端緒たり、尋で土阿兩國高知縣會議長に上り、翌十三年三月立志社々長として偶々大阪に於て開會せる愛國會大會に出席し遂に推舉せられて同議長に選ばれ同會を代表して國會開設請願書捧呈の委員となる上京して太政官に到り請願書を捧呈す、越て十四年十月君發企となりて汎く同志の政客に説き自由黨を組織し一身を黨務に献酬して東驅西馳爲めに席暖かなる能はず、爾來十年一日の如く克く黨務に盡して瘁阻最も力む、尋で二十年十月三大事件建白の爲め高知縣民總代として上京し、幹旋大に爲すあらんとす、時に偶々保安條例に觸れ東京退去の命を蒙りしも、君嚴として之を肯ず遂に輕禁錮二年六箇月に處せられしが、二十二年二月十一日紀元の佳節

に際し茲に憲法發布の大典あり、君亦此時に於ける大赦の思命に接し出獄して亦政界に雄飛するに至る、其翌年高知縣第三區より推す處となり、初期衆議院議員に當選し爾來毎回之が選舉に當り、延て今日に至る、同二十六年十一月第五議會に於ける全院委員長となり、翌二十七年第六議會の開かるゝや下院副議長の椅子に擧げられ、尋で三十一年五月第十二議會に於ては遂に衆議院議長の月桂冠を戴くに至る、同年十一月第十三議會の開かるゝや、衆望の歸する處となり再び議長の榮職に昇る、君資性沈毅事に臨み機に當り自若として動する事なく、其議長となりて下院に臨むや、克く三百の代議士を操縦して國家補弼の任を全ふし、至誠を首として忠愛を尙ぶと共に、其責を明にして一意邁往克く諸般の局に臨んで活氣蓬勃、躍然として眞に活動的好領袖たり、二十世紀の政事界、後進類多の政客を凌いで綽然伊侯が政友會一部の牛耳を執て其重鎮たり、嗚呼偉なる哉片岡君壯なる哉健吉氏實に當代政界の大偉傑

余輩の特に君を目して人物の稱を呈するもの亦謂所なきに非ざるなり、君が現下に處せしの偉業それ斯くの如し而して片岡氏が此半面に於て君が隻手となりて、その願愛なからしめば、是れ實に其夫人の力にして、克く家庭の美を擧げ君が家名を博せしの積功は宜敷則つて以て世の閨秀が鑑とするに足る、方今苟も人物名士と稱するもの、閨閩皆美德爛熳たるの風を慕ふて其高德を稱すと又以て其人となりを知るべし。

岩崎彌之助と其夫人

明治實業界の泰斗として至る處三菱の名を知られざるなき、岩崎彌之助君の偉業は、今や喋々稱するの言を待たず、然れば是れより君が令閨の壯圖を記し以て世人に介せん、君の夫人は故伯爵後藤象次郎君の娘にして、嫁してより、克く君を補翼し、其名聲を擧げしめ、貞操慈仁に至らざるなし、岩崎家に於て、弘く公共の事業、若くは慈善行

爲に盡すは、殆んど此夫人の内助効を奏せしものなりとも謂つべく、今回岩崎家より東京帝國大學に寄献せしマクスミユラー文庫の如きは實に其數一萬二千冊以上の大部にして其價格三萬圓に相當する由、之が運賃等をも通計すれば三萬六千圓に達すといふ、此文庫は世界無比にして、故英國樞密顧問官オクスフォード大學言語學教授ドクトル、フリードリヒ、マクスミユラー氏の自傳並に一切の藏書を收めたるものにして、其中には印度の古聖典グヘタ出版に用ひたる一切の材料もありといふ、此舉の如きも夫人の力其効を奉せし所にして實に其美譽亦稱賛するに絶たり、夫人が諸種の爲めに其爲したる德行枚擧に遑あらずして克く拙筆の盡す處にあらず、單に其一端を記するのみ。

柳澤伯爵と其夫人

伯爵 柳澤保惠君の御先代は大和國郡山の城主柳澤保申君なり、保惠君は素と御分家

越後國黒川の藩主柳澤家より入りて本家を嗣ぐ、保申君の夫人は、明子と申す年齒正に五十六歳に渡せられ、故一條忠香公の令媛なり、畏も 皇后陛下の御姉君に當らせられ、御幼少にして英敏衆を抜で一を開て萬を知るの機智あり、風姿絶美にして當代名族中多く其比を見ず、夙に古今東西諸家百科の學を修めて之に通じ、威徳彌高く座らにして衆の畏服する處なる、常に禮節を重んじてよく古典に明く、名聲同族中に冠たり、伯に嫁してより爾來益々其淑操高く、内外貴顯の間に樹ちて交際に心を用ひ苟も之を忽にせず、偶々傍人の上座を押す處となるも常に謙讓して自ら辭じ以て其相當の席に着く、然も嬉色を溢へて來賓に應接し怠る處なし、夫人内政を理する緩嚴其中を謀り淑徳以てよく子弟訓育の任に當る、亦伯を輔翼し力めて内願の憂無からしむ、今や華族と稱する者其數幾頼、然れども其徳操以て閨室の好模範たるべきは柳澤伯夫人を措て亦他に多く之を見ざる處なり、令媛を季子といふ、保惠君今外國に在り歸朝の後之を合沓の禮を擧ぐべしと聞く。

本多子爵と其母堂

子爵本多忠鋒君は嚴父を忠恕侯と申され今の正五位子爵西尾忠篤君の令弟にして出でて本多家を嗣ぎ舊伊豫國神戸の城主采地一萬五千石を領す、實に七本多の一家なり、母堂欽子の方は御家附の媛なり、忠恕公を迎へてより琴瑟相和し嬉祥の内在られしが、天何ぞ無情なる、明治十七年三月十七日忠恕君行年三十二歳にして薨去せられき、時に夫人欽子芳紀正に二十六咲き後れたる山櫻の姿ゆかじき風情ありしが聖經賢傳之を躬に行ひ、貞操淑徳愈々固く爾來十有幾年の内恰も一日の如く自ら能く家政を整理し力めて節儉を旨とし冗費を省き常に家人を誡めて曰く、「食前方丈侍女幾百尙且つ一たび掌拍てば龍肝鳳肉前に積で山をなじ、吳姬越媛傍らに奉還する秦皇の阿房煬帝の廣苑之を望むべからず、驕者は人を矯するの毒なり、節儉は家を起し身を樹つるの藥なり、五帝三王之を以て興り、秦帝煬皇之に依て亡ぶ事誇大に似たりと雖も又

以て少事に愉ふべし、宜しく眷々服膺して須臾片時も心に忘るべからず二月江南の瓜を進むる如きは之を好まざるの處と、婢奴を罰して以て其節美を愛す、今や日を追うて華奢に流るゝに當り節約夫人の如きに對し何の面ありて以て之に見へんとするや、世の身分不相應のハイカラ連大に之を鑑みて猛省せざるべけんや、郎は麻布森元町一丁目二十八番地に在り夫人の名近隣に高し。

西郷南洲翁と其夫人

故西郷南洲翁の英名は人の知る處其夫人は資性貞淑、英邁にして氣骨あり、翁校徒の擧ぐる處となり、大義を誤りて一朝城山の露と消ゆるや、舊知近識相謀つて翁の爲めに碑をたて之を吊す、墓に詣づるもの皆往事を追想して低徊暗涙轉た忍びざるものあり、朝夕香花の絶ゆるなし、而して夫人官家を憚り且つ人の譏誚を配慮じ、忌日と雖も白晝尙ほ拜に參せず、而して夜に及べば潜かに微行して墓前に至り之を拜じ香花

を手向て其冥福を祈り追感断腸泣きつゝ曉に達すといふ、其心中察するに餘りあり、爾來力めて素行を嚴肅にし、以て其身の清淑を期すと、推感以て夫人が胸裏に及べば悲慨蓋し常人の得て計るべからざるものあらん。

山田顯義伯と其夫人

故伯爵山田顯義君の夫人は名を龍子といふ、嘉永二年山口後河原に生る、少にして英敏卓見あり、伯の人となり慕ひ、心私に其偶を期す、偶々幕府政を失し四方騷然たり、山田伯此間に在り勤王の義を唱へ身を兵馬の中に置で轉戦殊功を樹つ、たつ子此時郷に在つて君が安泰を祈る、後維新の改革あり、伯功を以て廟堂に立ち其重きをなすに及び迎へて夫人とす、而して伯の後歐洲に巡遊するや、夫人孤閨を堅守し徳操近人の稱する處となる、又夫人好んで佛學を修め文辭亦其長ずる處にして、當時貴夫人界に多く其比を見ず。

佐竹侯爵と其祖母堂

侯爵佐竹義生君の祖母堂は山内容堂公の媛なり、悦姫といふ資性敏にして書史に精しく、殿君の英才を稟けて頗る才媛の名あり、侯の祖父を佐竹佐京太夫といふ當時今業平の稱あり、又一世の好男兒たり、容堂公之を見て以て己が愛媛悦姫を遣し介して之に偶せしむ、伉儷相和す然るに情天何の恨在つてか此好男兒に壽齡を假さず、翌安政五年遂に不歸の客となる、時に夫人芳紀正に十八歳、黒髪を断ちて夫君が冥福を祈り、了鏡院と號す、爾來四十有餘年貞堅淑操未だ變る事なし本年正に六十歳に及ぶ、其烈度古今に絶す。

阿部子爵と其夫人

子爵阿部正功君は播磨守と稱し、舊奥州白川の城主にして十萬石を領す、夫人は照子の

方と稱せられ御年正に四十歳に渡せらる、御父君は故從一位徳大寺公純朝臣夫人は其五女に在し、今今の侍從長内大臣徳大寺實則侯、及び樞密院議長西園寺公望公、大阪の豪族住友吉右衛門等と御同胞に當らせられ、天資賢才にして學博く徳高く、子に嫁してより貞操堅固にし琴瑟相和し公達三人と媛君三人あり、朝夕御愛育に餘念なしとが、眞に得がたき閨闈とこそ申すべけれ。

栗生武右衛門と其夫人

栗生武右衛門氏は兜町に於て屈指の仲買店の主人なり、君は素と殆んど無一物の身を以て、遂に克今日に至りし人、其堅忍にして熱心なる、此巨萬の身代となるに及びし基なり、君の細君は商業に長じ、頗る機敏にして、内に在つてはよく夫を助けて家政の繁榮を期し、出でては商務を補贊して其盛大を計る、殊に夫人は順才ありて、貸金の請求等に於ては、細君が出かくる時は、主人に於て持てあます、貸口も、必ず、

取り上げて来る、又債務者も細君の辨才には皆敵せずとかや、之に就て好話あり、栗生氏は偶々彼の往年迄長髪の代議士の高梨哲四郎氏に得意先として、米の賣掛代金の積りて貸となりしものあり、主人度々之を催促するも高梨却々返済せず、大に閉口し遂に之を細君に相談す、細君之を聞き微笑して以て易事となし、妾必ず之を受取り來らんと答ふ、依て氏細君に其全權を委す、夫人直に腕車を飛して高梨の宅に赴き、主人に面會を求め、書生出で夫人を一問に通ず、待つ事少時、高梨先生出で來りて面接す、依て夫人高梨に問うて曰く「今日は何卒先生に御鑑定を願ひ度儀あり」と、高梨其事件の如何なるかを問ふ、夫人曰く「實は米の賣掛代金請求の件ですが必ず取れるものなりや、否や」と問ふ、高梨曰く「夫れは必ず受取れます、又貸したものの故に訴訟せば勝つ事疑ひなし、然し尙参考の爲め、何ぞ證書にてもあらば拜見した」と、夫人此時なりと、忽ち懐中より、一通の證書を出して氏に示す、高梨手に取りて之を見れば、何ぞ計らん、高梨自身栗生より借りたる米代金の附ならんとは、流石の先生も

これには啞然たる事少時、乃ち細君が頼才に驚き、「之は一番やられた」と云ひつゝ遂に其代金を仕掛ひしと云ふ。

犬養毅と其夫人

犬養毅といへば何人も憲政黨内閣の句餘文相として知らざる者なかるべし、君は正三位と云ふ尊い位を有して居れるなり、君は元岡山縣の人、幼にして學を犬養松窓の門に修め、後藤田茂吉氏に就て文を練る、君が天性は實に此文に在りしと見へ、數萬言の長論立るに成り、然も字々句句皆金玉、師の又之を改削すべきの處なかりしといふ、君が此健腕たるや即ち後に西南戦争の時、報知新聞の通信員となり、亂彈雨下の間に在つて、巧に其戦況を報導せられし基なり、此時君年甫めて二十を越せし事僅に二歳のみ、夫より田口卯吉君と共に論文壇に樹ちしは、實に明治の十三年なりき、越えて翌年、大隈伯の部下として官海に入りぬ、位置は統計院權少書記官にして正七位に

叙せられたり、夫より伯の冠を桂ぐるや、共に退て再び報知社に入る、又明治十八年の頃末廣鐵腸を助けて朝野新聞に筆を揮ひし事あり、君は元來却々女房孝行の方にして頗る可愛がるその事なり、先年鎌倉や大磯等へ轉地して療養せし時等も、主侍醫は君一人にて行く方宜敷からんと云ひしかど、遂に其勸めに従はずして妻君を連れ赴きしと云ふ、かゝれば君は酒席宴會等の座にても、常に妻を迎へしより、未だ嘗て他所の女に惚れし事なしと云ひ居れり、如何となれば君が夫人より外に、此廣き世界に又と美人は見受けぬとの事、宜なる哉、君が艶聞は吾人も餘り耳にせし事なし、君が妻君に就ての持論と云ふは一寸又妙なり、一體妻を娶るには決して大家や金満家より貰ふべからず、彼の末松男などは伊藤の令媛を妻にせしより、遂に大臣博士となり、男爵と迄累進せしかど、世人は君が腕の如何は願はずして、皆侯のある力なりと稱する由なり、金堅でさへ司法大臣に昇りて同じ男爵となられしなれば、唯だ侯の幕下として之が乾兒にてさへあらば、皆等しく大臣たられしなり、豈馬鹿々々しき話に

あらずや、全體闊大なるを望むは名士として苟くも世に立ち、政界に處する者としては大に耻づべき事にして、妻は必ず自分より下より迎ふべきものなり」と、其氣焰萬丈の體なり、此君にして實に妻君には甘きと云ふ、眞に君の妻君は果報の人なり、君が妻君を愛して片時も忘れぬと云ふに就て好逸話あり、習慣は第二の天性なりとは克く云ひしもの、君が嘗て大隈伯の宅にて散々平常の氣焰を吐き、得意に成つて居りしが爲めに大に深更に及び、遂に泊る事とは成りぬ、而して伯と同席し、共に枕を並べて以て寢に就くと云ふ譯となる、然るに更酣月暗たるに及びて、如何せし事乎、先生グルリ、横を向き口をムジヤ／＼させつゝ「お國々々」と細君の名を現の間寢言に呼びぬ、偶々伯は未だ夢結ばれずして寢付かざりしが、之を聞き大に驚き入りしとぞ、君又頗る刀劍の鑑定に精しく、本阿彌を凌ぐと云ふ事は、已に世人の知る處なり、嘗て讀賣新聞に於て今村長賀が正宗をうと云ふ人間は古來より日本には無い者なりと云ふ論を發表せし事あり、此時世人は之を見て反對、賛成の聲頗る八ヶ間敷く、大に騒

然たりき此時に當り「正宗といふ人は居りしやも計り難けれど今に世間に於て珍重する處の正宗と稱する刀劍は、其正宗の作に非ず」と云ふ説を稿して投書せしものありき、然も兩三人なり、當時受持記者先生も一寸之には面食ひしが、後に聞けば、皆犬養先生の變名して種々の投書を爲せしものなりしとぞ、君其當時日本經濟會の創設せらるゝや、衆望の推す處となり、擧げられて之が會主となりぬ、後大隈伯の改進黨總理を辭し、官海に入りて外務大臣の椅子に上るや、意見合はずして自ら脱黨し、専ら西走東奔大同派を補翼せしが、後再び歸復して改進黨に入りて之に籍を置き、尾崎學堂等と共に報知新聞社に入りて執筆す、明治二十三年始めて帝國議會の開設せらるゝや、岡山縣第三區より當選し、爾來毎に當選す、降りて二十九年、第七議會開會中精勵の賞として、銀盃一個を下賜せらる、君は頗る健筆、政務の餘暇に政海の燈臺、議事典型等の書を著し、又經濟學の方にも多少明るくして圭氏經濟學なる作編あり、君去る三十一年十一月伊侯の憲政黨内閣

成るや擧げられて文相の椅子に昇りしも在職僅に旬餘、君が積年の大經倫を施すの機を見ず、内閣の瓦解と共に其冠を掛けられ遂に其實を觀ざりしは大に遺憾の次第なり、君今や本黨中に在りてよく黨務に献策し、巍然として其牛耳を執りつゝあり、夫人國子此間に居して克く家政を全ふし、和祥愛々として、其名世人の知る所となる、又賞するに足る閨秀たり、今や徳義地を掃ひ入情益々輕薄に流れんとし、苟も名士貴族と稱するの輩中多くは船板屏に見越の松、猫一疋に下婢一人の外、大切なる御妾様と稱する者を圍ひ置くものあるの中にありて、貞操淑篤よく琴瑟相和し、以て君が行爲を全ふせしめつゝある夫人の如き實に多く其比を見ざる處、君が寢言に迄其名を呼ぶ亦所以なきに非ざるなり。

野口小蘋女史

野口小蘋女史は野口正章君の夫人にして名は親、字は清婉、父を松村春岱といふ、阿

波の人出で大阪に住し、弘化四年女史を生む、女史幼にして英邁夙に繪畫に志を樹て文久三年遂に京都に上り日根野對山畫伯に従ひ大に其技に熟達す、明治四年東京に來り漢詩の泰斗岡本黄石翁を師として研究其奥を極む、同六年女史の名禁中に聞へ尊命を拜して、皇后陛下御寢殿の屏障を畫く、降りて十五年東洋繪畫共進會の開かるゝや畏くも、皇后陛下の御前に於て揮毫するの榮を賜はる、二十二年華族女學校教授となり、第三回内國勸業博覽會の審査員たり、女史畫技を以て當代中其第一流たり、加ふるに詩に巧にして又書を善くす、一度筆を揮へば龍躍り雲起るの勢あり、共進會等に於て賞牌を受けたる事其數を知らず、實に三絶の名あり。

有馬伯爵と其夫人

正四位伯爵有馬頼萬君は舊筑後久留米の城主にして二十一萬石を領す、小松宮彰仁親王の息所頼子殿下の令弟に渡らせらる殿君を慶頼君と申し中務大輔たり、成辰の役

巧によりて賞典祿二千五百石を賜はる、前夫人は贈太政大臣岩倉具視公の姫君にして常子の方と申しき後故ありて御離縁となる、時に二人の御子あり、禎子媛二歳、頼寧君には未だ襁褓に在りき、明治二十二年舊下野宇都宮の城主正五位子爵戸田忠友君の長女豊子の方を迎へ後室となす、豊子時に二十一歳に渡せらる入興の典頗る盛美なり、きとず夫人聰明にして徳學高く、麗美にして風姿婉婉たり、又夙に琴を好せられ今や其技神に入るの稱あり、夫人月に對して一度之を彈せば高韻凄絶行雲過り、松風之に和す、清風明月の夕澹澹たる、偶田の流に對し、一曲を奏して以て樂むとかや、其雅量大に賞すべし、夫人嫁してより、以來十有二年一日の如く、よく伯に仕へて貞に、家政を處して六に其實を揚ぐ、常に子弟を愛育し以て其人となるを嬉ぶ、孟母の賢又之に不及と云ふ、實に夫人の名聲有馬の水天宮より高し。

尾崎學堂と其夫人

前文部大臣尾崎行雄氏の夫人は神奈川縣の人、年甫めて十六歳に小學校の業を卒ふるや小桃天々氏に嫁す、天資雄壯事に當りて挫せず、堅忍不撓の氣骨あり、明治の十九年井上伯の條約改正論起るや、君故後藤伯と共に大に之を攻撃し、遂に保安條例に觸れて逐客となる、偶々夫人産褥に在り、家人其の愕かん事を恐れ敢て之を告げず、既にして夫人之を知る、家人慰めて曰く、氏の退去、數旬のみ亦心を勞する勿れと、時に夫人莞つて曰く「郎君已に政事に力を盡す爾來必ず多事此件の如き一小事のみ」と、平然たり、次で氏海外に遊び二十二年の冬歸朝す、夫人此間に在つて日夜學事に勉勵し、大に得る處あり、翌二十三年國會開設と共に君、三重縣第五區より推されて衆議院議員に當撰し、三十年外務省參事官となり、進んで翌年憲政内閣の成るや君遂に文相の椅子に上るに至る、夫人の此中に在つて君に仕ふるや十年一日の如く、能く一家

を理し君を内助し君が東奔西馳政事に餘暇なきの時に當り以て其内願なからしむ、是れ實に夫人の内政宜しきを得たるによるものと云ふべし、夫人又交際に巧にして、弘く閣相政客に接し能く時事を談じ客をして啞然たらしむる事ありとぞ、實に後來有望の賢夫人と云ふべし。

山川操子刀白

古來貞操の二字、夫人の行意が高きを指して之を呈す、然も余輩は其字解を知つて未だ其の之が的眞の夫人を見る蓋し稀なり、然らば則ち貞操の語如何なる夫人に冠して其實を得るや、余輩同胞幾千萬願多日夕其數を増す、然も貞操の名を呈して現代其の美德を稱するもの山川操子を指て亦他に有らんや、夫人は會津の士陸軍少將山川浩氏の令妹なり、若ふして同藩の某に嫁す、容姿絶美言語明晰普賢菩薩の再來を見るが如し、夫君に仕る貞にして大に内政を助く、然るに不幸天此の良縁を忘れしか、婚後僅

にして鴛鴦翼折れ、連理枝を裂くの悲運に逢ふ、時に夫人年尚ほ若く芳艸春未だ開なり、人其の再嫁を勸むるも夫人貞操嚴烈誓つて兩夫に見えず、志を立て、嗚然上京し遂に魯國に遊學す勉苦多時、よく國內の事情に精通し傍ら又佛國語を修めて之に熟す、歸朝後宮中に仕へ終に 皇后陛下に親近するの榮を得、外人拜接するに際し能く通奏の勞を執る、常に質素を主とし冗費を省き餘裕を以て有爲の青年に與ふ、然れば夫人の家常に幾名の好學生を見る、吁方今徳義日に非にして上下其の弊に靡かんとするの時、貞操夫人の如き寡獨十年一日の如く自ら世に處して能く其名聲を博す、操子の名實に欺かずと云ふべし、新聞紙上日々其汚行を暴露せらるるもの是を讀んで其穢腸を一洗せよ、余輩が夫人を推して古今其匹儔を見ずとなす、又所謂なきに非ざるなり。

京極子爵と其夫人

子爵京極高德君は元讃岐國丸龜の城主にして采地五萬千五百十二石を領す、夫人は熊子の方と申す本年四十二歳に渡せらる、山内子爵家より入る、夫人又頗る才色あり、鸞鳳親く家庭寛かにして兒福者なり、子女十八人あり、實に連枝御繁榮の至りならずや、夫人育養の巧空からず息姫何れも皆英賢に渡らせらるゝと承はる、邸は下谷區入谷町百四十三番地に在り、夫人が徳の如何に高くして其慈愛に深きかは余が喋々を要せざる處好事門を出でずと雖も遂に近人の賞する處となる、嗚呼亦偉なる哉。

堀子爵と其夫人

子爵堀親篤君の夫人は御家附の媛なり、嚴君を堀岩見守殿と稱し、信州飯田の城主にして一萬七千石を領せらる、夫人素家君の教育を受けしも天資英敏にして東西の學に

長じ婦人としての行爲一として其良處を知らざるはなく、皆其技に秀づといふ、夫君親篤君の侯爵細川家より入りて家を嗣がせらるゝや、家庭密にして安泰に、よく内政を補助して淺草區向柳原町一丁目十七番地の邸にあり、夫人名を喜子といふ三十歳と承る、子爵は嘗て淺草區長として其職に盡くしてありし當時も夫人は能く區内の慈善事業に協力されたる所少なからざりしとなん之を知るもの夫人の徳を口にしつゝありと云ふ。

福地櫻痴居士と其夫人

櫻痴居士福地源一郎君の夫人は、吉原江戸町二丁目菓子商竹村の女なり、柳眉花顔小町も亦三舍を避く、居士の想ふ處となりて遂に其妻となる、偶々居士著す所の書政機に係する秘を洩すの疑に逢ひ、警吏の捕ふる處となり獄に在る事年餘、免刑に及び赤貧大に苦む、依て止むなく借家を廢して夫人を知己本阿彌光賀氏の家に預く、居士夫

人の身を養ふの裕なきを思ひ、夫人に告げて他に良縁を求めんを諭す、夫人之を聞き端然襟を正して曰く「老婦は素も同心異體のみ妾の君に嫁するや始めより苦樂相供にし、喜憂等ふせんを期す、今や貧困明日の料に苦むも、之れ素と一小事のみ、俱に勤めて怠らざれば遂に克く名を擧げ家を起す亦難きに非ず、何んぞ卿を捨て又他に嫁せんや、貞女兩夫に見へずと、妾性迂愚好く君を助けて妻たるもの道盡すを知る少なしと雖も亦赤誠力めて其足らざらんを恐る」と、涕諫久ふす、居士其の貞操を愛し爾來酷苦多年終に名士偉傑の間に在りて能く名聲を擧げ拔んでられて大藏大椽となり、後歐米に遊學して大に得る處あり、歸朝後筆を文壇に揮ふて巍然頭角を露はし明治の近代巨擘の稱を博す、夫人常に君に仕へて貞淑温雅儉素を旨として家政を理し、居士に就て文を修め學を習ひ諸氏百科の書を通誦して皆奥を極む學徳並びなきの才智を以て能く家庭を見つゝありといふ。

早川龍助と其夫人

早川龍助君は愛知縣選出の代議士にして三河國の人嘉永六年八月十二日を以て碧海郡中島村に生る、祖先は清和源氏なり、明治四年選ばれて額田縣の小區長となり、十三年郷里より擧げられて縣會副議長となる、明治十八年米國に航し、大に農商業の視察をなし二十六年再び渡航す、夫より先二十三年七月議會新設せらるゝや當選して代議士となり爾來籍を政友會に置く君の夫人はさね子といふ宇都野龍積君の四女にして幼にして聰明頗る才媛の名高し、明治八年の冬入りて君の令閨となる、貞操にして淑徳あり、君の洋行中は常によく家を守りて其内政を全うす、亦得易からざる好閨といふべき乎。

穂積博士と其夫人

法學博士穂積陳重氏は、當時公法學の泰斗として法界に知られ、又自身も然信自得意ならん、されども今より約二十有餘年の昔、君が英國に洋航して「みつどる、てんぶる」の法學院を卒業し、進んで獨逸に至り、ベルリン大學に入りて法理學を研究し、學成つて歸朝せし當座は、未だ世人皆を君が眞固の技量を識らざる者多かりし、此時君は同藩の好みと、洋行前、書生時代に於て隨分世話に成りしとの關係より、暫く兒島の宅に厄介に成りて居りぬ、兒島は其當時大審院長從三位勳四等と云ふ紳々たる身分なりしかば、毎晩兒島が君に裁判の講釋をして聞かせしかば、流石君も大に閉口せしとが、其辭兒島氏は當時裁判官中、一番解らずやなりきといふ、君の夫人は濫澤榮一男の娘にして兒島氏が、媒介したるなりとぞ、夫人はさすが男の英資を稟けし種程ありて、却々秀閣として人に重きを置かるゝ價值のある夫人にして英才衆に抜んで、貞徳

亦篤くして頗る慈善心に富めり、常に君を補助献策し、内政其宜しきを得、心を用ひて家政の全きを期し、子弟の教育に餘念なし、實に其徳風衆に及ぼし、天晴男の令媛君の令閨として其名世に綽々たり。

牧野貞寧子爵と其夫人

正五位子爵牧野貞寧君は元常陸國笠間の藩士牧野備後守の御子なり采地八百石を領す、夫人は名を美子と呼ぶ年齒三十四歳に渡せられ、御分家從五位子爵牧野忠篤君の姉君に當らせられ、本所區綠町二丁目二十四番地の邸に在せり、夫人夙に機敏にして英智幼より衆に超へ文學に志し篤く、又諸藝に秀でさせ玉ひ閨閣としての諸藝得て其妙を極めざるはなく、當代貴族中又多く其比を見ざるの處なりとす、夫人歸してより姫君御一方を擧ぐ悦子姫と申す頗る風姿高くして才媛の名あり、夫人家庭の養育其宜敷を得しによる、又閨秀たるに愧ぢず。

加藤子爵と其夫人

從三位子爵加藤泰秋君は元伊豫國大洲の城主六萬石加藤遠江守と稱せし人、夫人は福子と云ふ聰明にして事理に明るく嫁してより御子八人あり御長女は前宮内大臣土方伯の令息久明君に嫁せしが不幸總行き風分るゝの悲に逢ふ、夫人本年御壽齡五十歳に渡せらる、好く御子方を教育し下谷區徒士町二丁目十六番地の舊邸に在り、徳操高く其行爲の賛稱すべきもの頗る多くよく紙筆の盡す處にあらず、依て唯此に其一汎を記するのみ。

矢島かぢ子女史

矢島かぢ子は舊熊本藩、肥後國益城郡の總庄矢島忠左衛門の女なり、天保五年四月を以て生る、家累代郷族にして代官を兼ね、母堂亦頗る才操あり、薰育以てよく幼弱尙

伊語を解す、家庭嚴格にしてかぢ子其の間に人となる、明治四年舎兄直方氏東京に在り用ひられて民部大丞たり、偶々二豎の襲ふ處となり幕に就て困伏すとき、奮然郷を辭して上京し看護最も力む、爲に病勢快全す、後女史教員講習所に入り教育學並に泰西の文史を修め、轉じて櫻井女學校に在り、明治十三年遂に洗禮を受けて基督教信徒となり夫より、駿河臺なるカリロン、氏の教堂に趣き、大に其教を學ぶ、後安井亭氏の勸により、築地なる、信榮女學校長ミッセ、ツル一氏を助け専ら女子の教育に従ふ、女史又此間に在つて英學に苦究し大に得る處あり、更に轉じて櫻井女學校に長たり、後新榮女學校の合併するや、愈々其企摸を増し、當時大に布教に従うて頗る其名聲を博す、甥横井時雄氏同時亦牧師たり、女史基督教に心を傾けしより爾來十年一日の如く、徳風最も揚る、然れども女史常に温厚にして人に驕らず、自ら宗教家を以てせず、其信者たるを以て勸となす、其謙讓賞するに足るものあり、實に近來其比を見ざるの宗教家たり。

恩地轍と其夫人

恩地轍氏の夫人は京都の人名をらい子といふ、勇武絶倫能く薙刀を揮ふの技に熟し其
薙刀を極む、又弘く我國固來の文學に秀で實に文武兼備の好夫人たり、嘗て夫人の東
京に在るや一夜賊あり、徒四人刀を抜いて闖入す、偶々轍氏不在なり、賊夫人を見恐
喝言を極めて脅す、夫人奥に退くや、忽ち薙刀を提げ揮ふて賊二人を傷け遂に縛し、
やがて之を諭して以て吏に渡す然も其際に當り賊に告げて曰く、「君子は其罪をせめて
其人を悪まずとかや、汝等刑終るの後よく改悛せば正に我家を訪へ、汝が糊口の資を
呈せん」と、其度量斯の如し、又其子弟を育する宜しきを得、最もよく内政の事に長
ずといふ。

毛利故公爵と其夫人

公爵毛利元徳君の令夫人は舊豊浦藩主毛利元運氏の媛なり名を安子といふ、天保十四
年を以て生る幼にして贈正一位毛利敬親公の養ふ處となる風豊高く優にして尚なり、
淑徳貞良操烈にして霜の如く容姿才學同族中に冠たり、夙に東西の經書に博通す、
又交際に巧にして常に雲井に近く出入し、淑操人を服す、夫人又謙讓の美德あり、身
名族に出づると雖も毫も驕らず、好く公に奉仕して、深窓の下内政宜しきを得、然る
に公去る二十九年十二月二十九日五十四歳にして薨去せらる、夫人悲哀す、それより、
五人の遺児を薫育して怠らず、夫人星霜と共に益々其徳高く頗る慈善公益に力を盡し
以て老後の樂とす。

山室軍平と其夫人

救世軍の中校山室軍平氏の夫人は喜恵子といふ、明治女學校を卒へて後山室氏に嫁す、昨年來娼妓自由廢業の擧あるや、山室氏四方奮走救世軍を指揮して之に當り大に世の喧騒する處となる、山室氏の築地に醜業婦救濟所を設立し自ら之に長たるや夫人亦力めて聚容する處の廢業者に就き篤く炊事裁縫編物等の職業を授く現に救濟所に在るもの八名ありと、皆よく夫人の徳に靡き成績頗るよろしといふ、以て夫人の志操の賞すべきかを知るに足らん、夫人年未だ壯なり、後來有望の好婦人として社會に遇せらるゝに至る可きは期して待つべきなり。

高崎男爵と其夫人

男爵高崎五六氏の夫人は鹿兒島の人若くして男に嫁す、夙に貞操の聞えあり、時に天下恟々幕政衰へ尊王攘夷の論起り將に高からんとす、男又勤王の大志を抱き、私に藩公の内命を奉じ四方の名士に唱導す、偶々幕吏の聞知する處となり探す事急なり、男乃ち船に乗じ郷地に逃んとす、時に颶風暴雨、怒濤山をなす、辛ふじて阿波の徳島に到り上陸せんとして幕吏の在るを知り、漸く小松浦に至り上陸す、後維新の機に際し、終に今日の榮位に昇るに至る、夫人此間に在つてよく家庭を守り子弟を育する嚴にして篤く、今尚ほ汲々として家事の内政に餘念なしといふ。

税所敦子刀自

税所敦子刀自はもと林氏の出にして文政八年京都鴨川の東錦織の里に生る資性頗る英敏幼にして和歌文章をよくす、年十八歳、時不幸父を失ひ、二十歳にして薩摩の人税所氏に歸し以て今の姓をかす、年二十八歳戀飛び鳳殘るの悲に會じ、夫より鹿兒島に在つて専ら姑君に仕へ、孝養怠らず、遂に故島津齋彬公の知る處となり、仕へて島

津久光公に至る、夫より又都に上り、明治八年 皇后陛下の召す處となり、内侍となる、爾來宮中に出入し、外に在つては弘く教育公共の益事に力を盡し、現時閣閣中其學徳を稱讃せられ眞に古今に卓絶す、刀自の巾幗界に偉勳ある、到底拙筆の克く盡す處にあらす今其咏歌の三四を記さんに

◎海邊時鳥

磯山に月は残りて時鳥あさみつ潮の上に啼くなり、

◎逢不逢戀

一と夜にて絶へんと知らばあしの家の賤機帯は解かざらまじを、あしびきの山を樂も御心に叶ふや富士の高根なるらん、諸共に見ばやと思ふ人は皆苦の下なり新の夜の月、力なき老も重さを覺へぬは霜夜にかづく衾なりけり、

山口將軍と其夫人

過年廣島師團の兵に長として旭日章旗高く北京城頭に翻へり聯合軍中我軍の最強たるを世に知らしめ偉勳 聖上の知召し給ふ處となり、本年七月十九日破格の昇叙に名譽を博せし従二位勳一等功二級男爵山口將軍の夫人は神田區關口町六番地森清右衛門氏の次女なり、年若ふして家政の爲め遂に身を北廓に沈め、金瓶樓の遊女となり名を少將と稱す、風姿輝媚語調優雅居る事數年、聲值廓中に高く、昔時高尾の全盛も亦及ばず、常に魁首を占む、偶々將軍に侍して君が後來大に爲すあるを先見し、遂に借老を契りしといふ、次で明治五年娼妓解放の後、君が風丰を暮ひ前約を守りて其令聞となる、夫人先に身の已に泥中に汚れたるを自ら耻ぢ、遜して多く貴顯に接せざらんを力むとかや、誠に其心中憐むべし、朝暮能く君に仕へ家政の冗費を節して儉約を旨とし、將軍出征の留守家婢を相戒めて其取締を嚴にし且我軍遠征の勞を忘ざらんがため

荷にも翠帳暖衣に身を置かず極めて素質の装をなす、其貞操感ずるに餘りあり、嗚呼夫人の如き實に泥中の蓮乎、其の心を用ひてよく夫君の偉名を恥めんを恐れ一意唯婦徳を固守し貞操自ら勉むるが如き實に古今稀に見る處となす、亦感ずべし。

志賀重昂と其夫人

志賀重昂氏は、政界に於て多少顔の賣れたる政客なり、元來君は、好人物にして鳥渡才のある者にはよく遣らるゝ質なり、尤も平常御心好しの君故又怪しむに足らず、一昨々年君が遊説の爲め奈良地方へ出張したる事あり、其砌、土地の知人より古梅園の筆を二三本送られき、君之を机上に載せて置きぬ然るに一日犬養毅先生來て、其筆を呉れよとねだられしかば、例の御心好の君、何の氣もつかず之を氏に呈しぬ、後に至りて犬養に何故あんな筆を好むのかと問へば、犬養は笑つて「彼の筆は何んとか云ふ上等の毛にて造りしものにして、其作り方がこれくで、當時彼様なよい筆を使用す

る人は日下部鳴鶴より外あるまい」と云はれ、偕ては惜しき事をしたりしと思ひしが、今更返せとも云へず、夫れなりけりに成りしとかや、君は又元來如何の主義にや、随分人の面前にてはよく細君の惚氣話をするとの事なるが、然し君が知己にて其細君の顔を見しもの無しと云ふ評判なり、イヤに大切にしたもの乎、妻君も亦少しく交際場裡に出かけらるべし、然し細君は貞淑で頗る稱するに足るとの事は、余が耳にする事なり、好専門を出でずと雖も、其積徳遂に稱賛せらるゝ處となる、亦遠きにあらざるべし。

黒田伯爵と其夫人

一度維新の好機運に乗じ、天資の英志を起して終に能く元勳の首位を占め、身樞密院議長の要職に在りて常に天顔に咫尺し、伊山兩内閣の間に立ちてよく國家の隆盛を計り衆億の惜む處となりて遂に永眠不歸の客となりし、故黒田伯の未亡夫人は、東都

の林木商信濃屋傳右衛門の娘なり、花顔柳腰學才絶秀ならずとなすも、又伯の夫人として世に耻ぢず、然も家政を理する巧妙を得、質素にして吝に流れず、温雅にして人に接する柵を作らず、能く婢僕を愛し皆其徳に化せしむると云ふ、又賞するに足るべし、今や伯逝いて無し夫人の孤胸果して如何、余輩夫人の章を記するに當り推感其の悲哀を察し、涙數行袖をぬらすを覺わす。

高梨代議士と其夫人

衆議院議員高梨哲四郎君の夫人はまつ子と云ふ、風丰清麗、善く古今東西の學を修め世事に博通す、家政に長じ最も交際の術に秀づ、名士論客と案を叩いて時事を快談し、有髯男兒をして亦一言隻句なからしむ、君の今日芳名を博するに至りし所以の亦夫人の力與つて偉なりとす、實に當代の好夫人後來益々其名徳の高からんを希ふ、夫人亦力めて可なり。

戸澤子爵と其母堂

子爵戸澤正巳君が殿君は舊出羽新庄六萬八千石の城主にして戸澤上總介と稱す、夫人は錦子の方と稱せられ御年五十歳に達せらる、夙に日本固有の女大學的教育を受けられしも、資性敏慧にしてよく事理を處断し、頗る才媛の名あり、生家は舊羽前庄内の藩主酒井家にして今の伯爵酒井忠篤君の御叔母に當らせらる、御入興の後齋鷺相和し御公達兩君あり明治二十一年四月二十四日長男正直君卒し、現主正巳君家を繼で麻布區森元町一丁目二十七番地の邸に在り錦子夫人の操名愈々高し。

上杉義順と其夫人

上杉義順氏の夫人小華女史は舊那須藩交代寄合太田原帶刀の女なり、名をかつ子といふ、安政二年江戸の本所に生る、父君は祿千五百石を食み、家庭嚴肅武士氣質の好範

たり、女史此中に生長し年甫めて八歳茶を松平宗伯翁に從つて其奥秘を極む流は千家の表なり、號を喜雪庵小華と云ふ、又音曲を故山登檢校に學び高瀬と號し技神に入るの稱あり、明治十一年舊高家上杉義順君に嫁す、義順君亦書畫に妙を得信齋と號し清雅の士なり、佳偶兩仙の趣きあり、江都俗塵の外に脱して身を幽靜の間に措く、其門弟殆んど萬千に近しといふ、實に風流界の泰斗たり。

柵橋文學士と其母堂

文學士柵橋一郎君の母堂を絢子といふ、號を梅菴と稱し文遠と字す、大阪の人なり、幼にして讀書を好み、弘く孔孟の書經に曉通し、大に勉學す、嚴君常にあや子を戒め之を勵す、絢子年十六歳にして奥野小山氏の下に至つて専ら勤學し、又三瓶信庵翁の門に入りて書を修む、後美濃の人柵橋松村氏に嫁す、蓋し師奥野小山氏の介する處なり、松村氏不幸壯にして明を失ふ、絢子氏に仕へて貞操琴瑟相和す、常に夫の傍に

侍して講書に力む、後美濃、尾張に轉遷し、家財寡くして困苦最も極む、絢子此間に在つて薪水の勞を親らし、盲目の夫君を助けよく三子を育す、然も堅操其志を更むず、節約を主として家政を理す、後遂に志を起して上京し、女子師範學校の教師となり、四等訓導に補せらるる後年又轉職學習院の教授となる、後三年職を辭し、芝山内に金聲學校を創立し、力めて女媛の教育に盡す、又絢子此間に在つて其息一郎氏を薰育し遂に大學を卒業するに至らしむ、一郎氏の現時文學界に其名聲を博せしは蓋し絢子平常家訓宜敷を致せし効と云ふべし、近世徳義地を掃ひ人情紙よりも薄きの時に際し絢子の如き其夫に仕へて貞に、其子を導いて以て家を起さしむ、實に賞すべきの至りなり、夫人の如き特筆大書以て其偉績を録するに足る。

有尾敬重と其夫人

有尾敬重氏の夫人は故井田讓氏夫人の令妹にして鳥居斷三氏の姪なり、花顔艶麗歩ん

蓮花を生ず、學識博く德行高く、志操又大に見るべきものあり、平常勤儉を旨とし、用を節して奴婢の華奢を制し自ら箕箒を執て率先して勵ます、故を以て奴婢其冗費を減じ、内政大に舉り、其風に服す、嘗て有尾氏の邸を牛込に創つるや、夫人自ら繩尺を採つて匠工を指揮し、庭園亦庭師を使驅して大に其雅韻を高めしといふ、夫人性清廉賢敏貞操にして言語明晰、銳意専心家政を嚴にし、交際に老練にして貴となく賤となく上となく下となく老となく若となく人に依て之に接する適妙、然も如何なる親知舊已と雖も襟を正して之に對し未だ一度も禮を亂さず、常に氏に勸めて曰く「畏も男子二十世紀の今日社會に處する當て力を大譽の一方に止むべし、豈區々たるの家政以て名士の關する處ならんや」と氏に仕ふる厚く能く氏を助けて以て現今の位置に昇らしむるもの亦夫人の力與て効ありしと云ふ、實に目今文弱に傾つゝある上流社會に於て夫人の如き雄々しきの態度を有するもの亦幾人かある、余輩の特筆以て夫人の行を賞賛する豈にいはれなきにあらざるなり。

前島密と其夫人

前島密君の夫人は舊徳川家藩士の娘なり、幼にして夙に女大學的日本固有の風を承く、と雖も天資聰明にして博識式部を歴し、嬋妍普賢を超ゆる事敷等生ながらにして先見の明あり、前島氏の英敏衆に秀づるを觀乞ふて婿となす、明治維新の後密氏時の内務卿大久保利通公の親遇を受け抜でられて内務少輔となるに及び政機を理する迅敏、難局に當て與らざるなく敏腕家の名閣内に高し、然れども君天質磊落能く大事に周到精密なるも時として毫も小事に留意せざるの風あり、よく閣相名士の間に在りて常にその往復せし紙箋机上に山をなすも君一披直に之を措く、偶々大久保公紀尾井坂の凶變あり、報亦君が邸に到る、君案を叩いて知名の士を失ふを悲む而して曩に卿より送來の諸書類も皆之を棄てしを悔ゆ、夫人側に在り君を慰諭して曰く「希ふ心を勞する勿れ」と、乃ち起て書齋に入り文庫を掲げ來りて氏の前に呈す、氏執て之を披けば已

に投せし大久保公の遺墨町重保して、悉く其の中に在り、氏大に其注意の密なるに嬉
驚す、夫人が平常の行爲推して知るべし、頃日星氏兇漢、伊庭が毒刃に斃る、君素と
星氏と親し又其偉傑を失ふを惜しむ、先年大久保公が變死の時の二の舞ありしや否や、
夫人貞操兼ね備り一家の内政嚴然として亂るゝなく、其徳よく家人に及ぶ、眞に我邦
純美の好婦人、宜敷則つて世の閨閨が模範とするに適す。

栗塚省吾と其夫人

敏腕判官の名當代に高き大審院判事栗塚省吾氏の夫人は横濱の者、某商賈の女なり、
年甫めて十二夙に歐米の學に希望を抱き、遂に米國宣教師の知遇を受け英學を修む、
後宣教師の歸國するや俱に從て米國に遊び、師に就きて日夜勉勵す、學成り歸朝す、
るに及んで省吾氏に嫁す、天資英敏一を聞て萬を知るの識あり容姿絶倫能く洋風の徳
に屏き交際に最も練し、一家を理する眞に歐米の風に似す、常に閨相貴顯の間に入

し大に貴重せらる、高德よく兩妹を薫陶し終に學才雙冠たる兩媛を出す、原川權平、
伊賀陽太郎の兩夫人即ち之なり、現下歐米的貴夫人中蓋し異數と云ふべき乎。

手島精一と其夫人

東京工業學校長たる手島精一氏の夫人は杉亨二氏の嬢なり、少くして英才群に秀づ、
夙に東西の學を習得し、博く古今の青史に曉達す、氏に嫁してより淑操徳行益々高く
氏の歐米に遊學する、前後十有幾年其間好く孤閨を守る嚴操、家内の諸事を親執し子
弟を薫陶するに盡し、家庭皆其徳に靡く、又和歌、漢詩を善くす、爾來其の作る處類
多山を成すも、人に之を慢する事なし、然も夫人の學才世人の知る處となる、又賢な
る哉。

中島歌子刀自

中島うた子は武州入間郡の郷士中島又左衛門の女なり弘化元年を以て森戸村に生る、父に従つて上京し牛込に居を定む、歌子幼にして故中村敬宇先生の門に入り大に勤學す、後出で水府の分藩たる、松平播磨守の奥に仕へて其知遇を受く、時に年甫めて十歳なり、過ぎて五年藩士黒澤忠三郎氏の養ふ處となる、黒澤氏其貞淑にして聰明なるを愛し、甥林忠左衛門に配す、うた子時に年十八歳なり、忠左衛門は役馬廻を勤め碌二百石を食む、夙に文武に秀でし名士たり、安政以降世間騷然となり、勤王佐幕の論大に起る、水藩最も盛なり、遂に櫻田の變を見る、文久三年六月忠左衛門正黨に組して、劍戈の間に樹つ、時に奸黨正黨の家族を捕へ之を質とす、歌子亦此難に逢ひ澁田の獄に幽せらる、後正黨遂に不幸敵せずして、忠左衛門松平大炊頭等と供に自訴し銃傷の爲め翌年正月遂に二十五歳を以て獄中に逝く、うた子後辛心て出獄し世を

潜んで東京に在り、亂平ぎ維新の治に及んで、又中島家を起す、老母を養ふて朝夕其孝を怠らず、夙に歌道を好み、加藤千浪氏に就て大に其奥を究む、後遂に偉名禁中の歌聞に達す、咏進の和歌あり、今二三を録せん

○朝の雪

いつの間に積りし今朝の雪ならん

曉までは月も見えしを

○隠士山を出る

山清水くも人絶えしあとにこそ

濁なき世の影は見えけれ、

○雪中竹

雪のうちに根ざしかためし若竹の

老てん年の光をぞ見る、

○雪消山色静

自雪の消えに七日より音羽山

峯の嵐も聞えざりけり、

歌子世に出でしより半世然も辛酸の内にて在つて頗る貞徳高く、學才秀で歌道に熟す、實に古今稀に見る所の好婦人、現代隨一流の閨閨たり。

金井之恭と其夫人

錦鷄間祇候正四位勳三等金井之恭君は上州島村の人書を以て名高し、字を子誠といひ亦錦鷄閑人の號あり、家素と賤業をなす、氏亦從つて之を執りしも夙に大志を抱きて臥龍風雲を得ざるを歎せしが偶々維新の機あり明治二年制度寮、行政官の録事を歴て少史に任じ、爾後氏廟堂に仕へて累進内閣大書記官より元老院議官となり、二十四年四月十五日貴族院議員の榮職に至る、夫人常に君に從つて最も盡す、夫人性英邁に

し少事に屈せず、氏を助けて屢々危地に臨み泰然たり、知人皆其膽に驚く氏が上州霧積山の温泉を發見したるが如き亦夫人の力與て大なりとす、方今上流社會文弱に流れ蒲柳事に堪ざるの令閨頗る多し、希くば夫人に鑑じて猛省之れ力めよ。

佐竹子爵と其夫人

子爵佐竹義理君は舊出羽新田の城主にして采地二萬石を領し、殿君は佐竹壹岐守と稱す、子の夫人は玉子の方と申し四十二才に渡せらる、今の侯爵佐竹義生君の姉君にして本家より入興せられしなり、翠閣夢濃かにして連理のかたらひ割なく比翼の契睦む、六人の御子を擧げられしが御二人は天死し給ひぬ夫人夙に家事に心を用ひさせ給ひ儉節を旨として華美に流れず、よく婢奴を憐み徳をほどこしつゝ今や本所區番場町四十八番地の邸に在り、子弟を育する事に力を盡し、又子に仕へて貞節愈々高く家人皆其美德に服すといふ。

村松しほ子

村松しほ子は舊上州沼田の藩士村松玄庵翁の女にして安政元年八月を以て江戸の邸内に生る、父は祿百五十石を食み、藩の典醫たり、しほ子幼にして英敏よく孔孟の書を覽へ年甫めて六才藩主今の正四位子爵土岐頼知君に仕へ夫人萬千子の寵遇を得、夙に醫術に志して家業を繼ぐ、後夫を迎へしも故あり離る、爾來一意専心其學業を修めて怠らず、明治十四年三月始めて其業を開き益々茲道に盡し同十八年遂に東京産婆會第六支部長となる、二十四年安生堂病院を起し弘く慈善を力め遂に露國皇太子殿下の寄送を辱ふす、近代女流醫界の偉傑たり。

杉山叙と其夫人

杉山叙氏の夫人は信州松本の人なり、交際に巧にして頗る頓才あり、杉山氏の收税官、

として嘗つ岡山の任地に趣くや、同地は實に治難の局たるを以て力を盡して其輕税を計る、然るに縣廳運之に反し、相峙して爭論沸鼎騷然として兩黨に分立するに至る、夫人此時に當り、巧に交際場裡に在つて上下相隔つなく、反對論者と雖もよく之に接して毫も其私交を破らず、遂に累卵薄氷將に倒れんとしたる官衙をして其全きを見るに至らしめしもの夫人の力亦偉大なりとす、後年に及んで徳行益々高く、貴婦人社會の女傑と稱せられ皆其淑操に倣ふといふ、此人にして此夫人ある又眞に好偶と云ふべき乎。

兒玉少介と其夫人

貴族院勅選議員正四位兒玉氏は長門山口の藩主毛利家の臣にして天保七年十月を以て生る後出で藩の顯職に昇り伊藤井上等の諸子は當時其配下たり、名を少介と云ひ聞太は其綽號なり、英邁にして磊落、少事を意とせず、伊藤井上兩子の英才、長く野に

在るべき人に非ざるを知り大に之を優待す、果して後年兩氏累進して宰相となり元勳と稱せらる、聞太氏此時に及んでも交誼昔日に變らず、人、其明に服す、明治五年京都府、奈良縣等に出任し、大藏、内務、太政官等に歴任し同十六年工部省に入り其書記官として健腕を揮ふに至りし所以のもの實に夫人の内助氏をして家事を愛へしめざるの力なり、亦慈善の心にとみ克く下賤を愛憐し、夫人に依て身を立てし者幾人なるをしらずといふ。

跡見花蹊女史

跡見花蹊女史は攝津西成郡木津村の郷士跡見重敬氏の次女なり、母を幾野といふ、女史天保十一年を以て郷に生る、其祖先は天種子の命より出づ、跡見赤鏑に至り始めて民間に下り累代郷士たり、女史資性英賞、望を抱いて大坂に至り後藤松蔭氏の門に入つて古今の學を修め、進んで書を圓山楚山翁に學び大に其技に達す、後女史京都に

上り、宮原節庵氏に就き書法を究め健筆の聞あり、偶々九條公の令閨女史の名を慕ひ延て之を見んと欲せしかど女史其未だ俄に命を拜して趨走する能はざるを以て之を辭す、令閨其氣骨に感じ、遂に駕を枉げて師弟の禮を取るに及んで始めて伺す、世人皆其の高傑を賞す、之より女史の名聲大に世に揚り、書畫又遠く海洋を隔てて清韓に知らる、後朝鮮の使節金綺秀氏我國に來朝す、然れども言語通せず、時の外交官女史をして會見を勧めしめ、以て其興を慰す、女史金氏に面接するや、直に筆を執て一絶を賦す、

扶桑深緑映三鶴林一

喜見高蹤海外臨、

形管縦無花入夢、

蕪詞也許表微忱一

と金氏又筆を執て之に答ふ、

恍惚依那日出林、

九天仙子肯來臨、

花蹊無盡生花筆、

歸後何堪惱才忱一

又女史維新の後東京に上るや、畏くも、皇后陛下の聞し見さるゝ處となり明治五年拜謁を給はる、時に御側の方より和歌一首参らせよとありければ女史かこみて、春の來て谷の鶯けふよりは

雲井に近く名のりそめけり、

と詠進し奉る、明治八年神田仲猿樂町に跡見女學校を設立し、同二十年今の小石川柳町の地に移し、専ら上流淑女の教育に従事せらる、二十有餘年、其門下より出づる處の賢女其數を知らず、現代巾幗界中其重をおかるゝ所以のもの亦理なきに非らざるなり。

高木總監と其夫人

海軍々醫總監高木兼寛君の夫人はとみ子といふ、長州の人故手塚律藏氏の長女にして安政元年七月本郷元町の邸に生る、父君故ありて下總佐倉に流寓し名を瀬脇壽人と改

む、時にとみ子幼にして此僻地に成長すると雖も常に父君の教薫宜敷を致し以て一意之に盡す、故にとみ子此中に人となりて天性聰明一を聞て萬を識るの智あり、淑徳遙かに秀で家君の教を服膺して片時も忘れず、氏に嫁してより後幾時もなくして高木氏海外に留學す、夫人此間に在つて孤閨克く質素を旨として華美に流れず、家事を親理して其の實を擧ぐ、氏歸朝の後累進して遂に今日の榮職に昇るに至る、夫人亦舞蹈の技に妙を得往年隨一の稱あり。

西中將と其夫人

抑々時勢の變遷に連れ國民が益々其驕奢の弊風に流るゝは實に歎すべき事どもなり、此華奢極まる今日に於て然も十年一日の如く、質素自ら奉じ、貞操能く婦徳を守り、勉めて家計を縝密にし天晴將軍の英名天下に高きと共に、此人にして此妻ありと、世人をして稱賛措く能はざるもの、吾輩は實に西陸軍中將令夫人を以て其人となす、夫

人中將に嫁してより令息令嬢あり、家庭嚴肅然も和氣満々として夫人の教訓宜しきを得、往年日清戦端を開くに當り將軍佐倉の第二旅團に長たり、命を奉じ鐵衣を束ねて出征の途に就かんとす、偶々夫人中將が門出に際し恭しく其前に捧げしは満巾の紙幣なりき、之ぞ即ち夫人が平常徒費を省き、斯かる時節の用意にも貯蓄めし貯金にして積りて茲に壹千圓の額となりしもの、流石の將軍も之を驚賞し夫人が用意愛でたき心を嬉び、之を收めて出征の途に上りしとぞ。
往昔土井利勝の妻金を鏡底に探りて良人が仕途の調度を助けしと、相對して實に古今の雙美夫人の龜鑑と稱すべし、將軍遠征の留守家族を誡めて我兵士の異域に苦戦するを想ひ、寒天尙薄衣素足浪費を省き積んで恤兵の捐に致せしといふ、方今上流社會に於ける令夫人、其全美に足れりとせず、歌舞伎場裡觀劇の一日に數十金を徒消し、估として顧みざるの輩、又以て如何となす、勤儉西夫人の如きに對し何の面やある、宜しく猛省して可なり。

古莊嘉門之其夫人

古莊嘉門氏の夫人は實に勇武非凡、往古巴、板額の勇あり、巧に大刀を振り雉刀を提げ、以て自らよく三軍に將たるの技備あり、其盛なる時は兩鬢所々面磨の痕を留めしといふ、往年古莊氏大阪控訴院長の榮職に在り、偶々中村六藏の廣澤參議暗殺事件あり、君亦其嫌疑を得て不意に警吏の君が家を襲ふあり、君時に家に在らず、家人皆狼狽す、夫人已に之を知り直に起つて六藏よりの來翰を蒐め皆之を袖中に隠し、夫人自ら其上に靜座し、泰然警官に應接し、婢僕を指揮して家宅を畏なく探らしむ、警官爲めに一も得る所なく手を空しく歸署す、夫人後に之を開き見るに皆平常往復の書信にして一の秘すべきものなかりきといふ、其舉や少しく輕に失すると雖も然も夫君を想ふの赤心實に此焦眉迅急の機に臨み自若として動せず、綽々として裕然事に當る、實に夫人の如き勇雄の人に非ずんば以てよく爲す能はず、爾來幾年夫人の淑徳愈々進

み、貴夫人社會に於て其勇胸を稱賞せらるゝに至る、
今や文弱に流れんとする此二十世紀に於て夫人の如き雄膽事に當りて驚かざるものは
蓋し異數となす、世の夫人連時々新紙三面に其耻をさらさるゝ細君等、白粉臭き馬の
足を陰し喰するの破廉耻を止め、勇膽此夫人の素行を習へ。

藤堂伯爵と其夫人

故伯爵藤堂高潔氏の夫人は侯爵蜂須賀家の令媛にして夙に英敏温雅にして徳高く頗る
勤王の志篤し、維新の際國內騷然たるの時に當り、克く夫君を説いて遂に王事に盡さ
しむるに至る、首め伯徳川氏の下に在つて知遇篤く其重を置かる、されば當時藩中佐
幕の論議にして亦他を顧みず、夫人此間に處して 皇恩の重きを唱導し大義を訓して
群臣の非を正さしむ、此の時に於て夫人の勤節なかりせば藤堂家の今日ある、斯くの
如くならざりし成らん、其徳や賞すべく其義氣や掬すべし、伯逝きて後孤聞よく貞節

固守して淑行壯烈霜の如し、子弟を撫する其宜敷を得芳聲籍甚、人をして轉た其徳風
に服せしむるものあり。

井田讓と其夫人

前全權公使故井田讓氏の夫人は有尾敬重君の夫人の令姉にして鳥居新三君の姪なり、
花顔婉麗、頗る交際に巧にして貞操高し、性律直にして虚名を好まず、過年濃尾に震
災あり、凶罹酸鼻を極む、近人擧つて義金を寄して新聞社に托す、然るに未だ夫人の
名を見ず、人怪んで其故を問へば、夫人答へて曰く、俗事多忙にして妾一人其局に
當る、愚考未だ救恤の事に及ぼさず、乃ち若干圓を人に托して之に寄す、何んぞ知
らん、夫人は已に數百金を投じて其知親の人を助け居りしなりとは、其雅量の廣くし
て慈仁に深き、僅々數圓を以て新聞に托し以て其名を誇るは夫人の特性として之を恥
る處なりと、氏逝てより遺子を育して教薫に餘念なしといふ、亦感ずべき哉。

滋野中將と其夫人

故陸軍中將 男爵 滋野清彦君の夫人は大阪の人父は東町奉行の與力にして祿二百石を食む、性を黒崎と云ふ男の嘗て大阪鎮臺に在るや夫人不幸にして家裕かならず、遂に身を校書の籍に入る、男茲に夫人の名を聞き之を納れて遂に令閨となす、風姿艶麗、細腰嬋娟歩々蓮をなす、其阪地にあるや妓名夙に高く京阪三妓の一と稱せらる、歌舞絃琴茶の湯、香花に至る迄一として其妙を極めざるなく、語調優にして温雅、男に嫁してより琴瑟相和し、志操又大に見るべきものあり、よく婢僕を勞り、大に家政に力を致す眞に當今山口中將の夫人と俱に軍人令閨中雙璧と稱すべし、余輩の夫人を茲に載する又所以なきに非ず。

芹澤判事と其夫人

判事 芹澤政温氏の夫人は英邁にして洒々落落々頗る義志俠心に富む、嘗て令息孝太郎氏の幼なる時家政大に意の如くならず、幾多辛酸を経るも毫も意に介せず、親近の災害に逢ふや、財を擧げて之に與へ、又夙に慈善に志篤く貧民を愛憐し徳望遠近に高し、氏に嫁してより未だ嘗て驕奢の風を爲さず、自ら箕箒を執て婢僕に率先す、内政質素を旨とし今尙餘財を以て慈善に寄せつゝありと云ふ、目今の女流社會皆深窓花を賞するの輩のみ、一度夫人の氣概を聞かば大に猛省せよ。

宗伯爵と其夫人

伯爵 宗重正氏の夫人は鍋島家の令嬢なり、名を綱子といふ明治七年宗家へ嫁す、入與の後夙に令聲あり、弘く古今の學藝に熟達し又頗る手續を善くす、下を憐み上を敬ひ

内君を助けて家政を理し、外交際に老練にして親粗遠近なく、人其美德を稱するも自ら遜りて以て其功を他に歸し少しも驕るの色なし、伯の舊臣に國分某といへるものあり老いて益々壯に主家へ仕て、忠誠最も力む、一年の春大に降雪あり、賤夫貧民皆其業に苦む、夫人之を聞知し乃ち國分老人を召し慈悲大に盡さしむ、偶々老人戸外にあり、庭前の雪を除くの時、黃鳥一羽雪に惱んで室中に飛入る、老人之を憐み捕へて餌を給し、以て之を放つ後夫人に謁するに及び之を告げて曰く「夫人の高徳又禽獸に及ぶ」と夫人之を聞き赧然老人に告げて云ふ「之れ妾の徳に非ず皆老人の積徳なり」と、之を賞して即咏一首を賜ふ、
慕ひよる梅が香ならで鶯の
あるじゆかしく宿を訪ふかな
と老人歎嬉して之を拜受す、夫人の如き真に我國固有の名夫人たり、常に和歌を善くし秀味頗る多かりしと云ふ。

森子爵と其夫人

多年の經世衆に超え、遂に文相の椅子に登りしも、惜い哉兎徒西野の毒刃に罹り、幾多有望の一身空しく一基の墓標に留め、恨を呑んで地下に眠りし故森有禮子の夫人は故岩倉右大臣の令姫なり森子故ありて先夫人を離別し淑徳堅貞なる日本固有的の良閨を求めしに際し、子岩倉公の令媛其賢敏なるを聞知し人を介して之を迎ふ、夫人子に嫁してより後少許、不幸森子兎刃に倒る、夫人哀慟連日涕泣寢食を廢す、家人數々諫むるに及びて後漸く之に従ふ、夫より寡居し、爾來身邊を飾らず、専ら遺兒の薰育に力を盡し其幸福を計りつゝあり、實に近代無比の貞女と云ふべし。

長谷川泰と其夫人

内務省衛生局長長谷川泰氏の夫人は天資英敏博識殊に獨語に長ず、然も豪邁の氣骨あり

り、氏の濟生學舎に於て子弟の教育を爲すや夫人側にあり、氏にして若し誤りあるや直に之を論難し以て其全きを期さしむ、其強辯にして明析なるの論旨、政客も又稀に見る處なりとす、夫人淑徳兼備り、能く上流の貴客に接して又其辯に感ぜしむ、然も内政に心を用ひ厨炊の冗費を節する嚴格、泰氏が出省の途次辻車の飛び乗りを爲すに相和す、亦一異風の夫人と云ふべし。

湯地大佐と其夫人

明治二十七八年の役、我第二軍の第一師團中、その第二聯隊第二大隊に長として、金州先登の偉勳を奏したる、陸軍歩兵大佐湯地弘氏の夫人は鹿兒島縣士族立花氏の女にして文字と稱す、幼にして兩親に離れ、孤となりて叔母の家に養はれしが、天資英敏年齒僅に十三歳にして小學校を修卒し、翌年同校の教師となる、越て十九歳の時出で大阪尋常師範學校に入り在る事四年、業を卒へて同校教授となる、明治二十四年叔母

病あり乃ち職を辭して歸郷し晝夜看護に怠らず、近人其孝に感服す、會々湯地氏の先閨二女を遺して逝くあり、媒人の介する所となりて之に嫁す、時に三十歳、大佐後佐倉の分營へ轉勤す、夫人亦二女を伴ふて隨ひ教育に心を盡し且つ親愛する事生母も不及といふ、然れば二女の學業大に進み校中常に其首を占めたりとす、過年大佐の出征するや、東都に出で牛込なる所有地に轉じ、其最小の家に入り勉めて質素を旨とし、克く貧民を慰り、其貸家の賃の如き、困苦見に堪えざるものある時は之を取らず、施與慈仁に心を盡す、爲に近隣皆其貞賢の徳を賛するに至る、爾來星霜變りて茲に六歳然も夫人の堅志は變る事なく、能く良人に仕へ子女を薰育し専ら慈善に怠りなしといふ、實に其貞操の高き其賢に慢せざるの淑徳、幾多軍人社會に於ける閨秀中正に其第一流を下らず。

井上伯爵と其夫人

伯爵井上馨氏の令夫人は新田萬次郎君の嬢なり、明治の初年中井弘氏東都築地に在りて多く淑女を薫育す、夫人又其家にあり、伯時に大藏少輔たり、中井氏の媒によりて夫人を娶る、夫人の生家は素と源家にして八幡公より出で新田義貞の後裔なり、徳川氏の時大に尊重せらるる所となり、格式十萬石を有す、夫人貞操堅固、能く伯を助けて歐州漫遊の途に上らしむ、後伯の名聲世に高く伊山兩侯に亞ぐに至れるもの夫人の内援與て力あり、其美德到底秃筆の盡す處にあらざるなり。

寺家村逸雅と其夫人

寺家村逸雅氏の夫人は名をあい子と云ふ、天保五年江戸日本橋龜河岸に生る、父は山田檢校の高弟二登檢校松和と云ふ、夫人は其の三女なり、年初めて五歳英敏の聞

高く好く彈琴の技に妙を得、天保十四年齡十歳にして松平阿波守に仕へ其奥附を命ぜらる、爾來嘉永五年に至る迄能く主に仕へ又藤堂伯夫人阿波公の姫に秘曲を授く、安政元年寺家村氏に嫁するや、琴瑟相和し家庭平靜、愈其妙技に長け、清風月明の夜、隅田の河畔に臨んで一彈すれば、高韻非凡行雁停り、松籟起る、其技神に入るの稱あり、當時和琴の高手他に匹儔を見ず、方今隨一と云ふ。

織田子爵と其夫人

織田子爵夫人は謙子の方と稱す、片桐眞信君の第八女に在して今の子爵片桐眞健君の御叔母に渡せらる、幼にして學徳あり、夫人今年五十四歳に當らせらるると雖も姿優にして春の風に吹き残せし樹の葉かぐれの花の如く眉目秀で遠山の黛麗しく蒼蛾の雲に揚るに似たり、其風姿の婉麗にして嬋妍たる事漸く四十歳位に見受けられぬ、當代名家、貴族中才媛美姬の名多しとするも、然も夫人の如きは蓋し古今東西絶えて其

比を見ざる所をなす、加ふるに貞操固くして新霜烈日の如く其名一世に冠たり。

京極子爵と其夫人

貴族院議員正四位子爵京極高厚君は舊但馬國豊岡の城主にして一萬五千石を領し京極飛騨守と稱せらる、今の夫人は本所區編澤町二丁目六番地小林正之助君の姉にしてもとの側室たり、性頗る順良にし温厚君に仕へて最も良し、今より二十年前先夫人の逝去せらるるや、擧げられて其夫人となる、爾來十年一日の如くよく家政を理し子女の教育に力め、子をして亦内願の愛なからしむ、實に夫人の如きは誠に感ずべき好閨なり。

黒木中將と其夫人

威名遙に九州の野に高く、部下幾萬の士卒を撫愛し、真に徳望三軍に高かりし、陸軍

中將黒木爲禎氏の令夫人は名を百子と云ふ、芳紀將に五五に過ぎず、然も其徳行の高くし其淑操の堅き、實に軍人たるものと夫人として、好模範と謂つべし將軍が部下の將士を好く勞り、厚く慰し静淑の中に百折不屈の男々しき心を收め、仁に武に機に臨み、人により、能く之に接待す、加ふるに學藝幼にして衆に秀で、品行夙に方正、家政を觀る嚴にして婢僕に厚し、嘗て福岡に在りける時、部下の特務曹長貴島尙武來りて夫人に出征の訣別を告ぐ、夫人満面喜色を現はし勵まして曰く「御身も日頃の志願協ふて愈々渡清出征の途に就かるるもかや、真に千載一遇の好機運、軍人の身として面目此上やある、妾も何より喜ばしく存じたり、固より生て還られん御覺悟はなかるべきも、皇軍勝ちて花々しく凱旋の曉再び御拜眉の日もあらば、其時こそ豚尾軍の生首を御土産に載きたし」と以て曹長を勵まし大に之を饗して歸せしとぞ、夫人の部下に厚き實に斯の如し、時に夫人年齢僅に二十歳を出でざりしと云ふ、それより夫人の徳望彌々高く將軍を助けて内願の愛なからしむ、實に閨秀の龜鑑と謂つべし。

後藤伯爵と其夫人

伯爵故後藤象次郎君の令夫人は名をゆき子といふ、弘化四年を以て大阪に生る、其父君は佐賀の藩士にして大阪藏家敷の留守居役たり、家政饒なりしを以て力めて夫人の薫育に盡し至らざるなむ、後迎られて伯爵の令閨となる、夫人風姿艶媚娟當代閨臣諸公の令閨中容姿其最たり、又人に接すに巧にして弘く天下の名士と交際し、よく處世の局を談じ卓見識絶壯客を走らす、言辭明晰語氣快活なり、後伯爵の板垣伯等と團合するや、夫人力めて其間にあり周旋よく盡す、嘗て伯大江、吉田の諸氏と機關新聞を起さんとて資金二萬圓を要す夫人乃ち岩崎彌之助氏を説いて直に之を借る、夫人の機知驚くべし、伯に後れしより爾來淑徳貞操を守りて、伯が冥福を祈り、以て老後の務となす。

河瀬秀治と其夫人

河瀬秀治氏の夫人は素と京都の舞子なり、故木戸考允公の夫人翠光院の義妹にして、資性豪邁なり、河瀬氏維新風雲の間に在つて京畿の名士と奮走し、足利尊氏の木像を刎ねて同士と共に大に勤王の義を唱ふ、幕吏之を知り、君を捕へんす、時に夫人身を以て君を救ふ、後君に嫁して、よく家政を理し、子女を育する嚴なり、傍ら筒井一溪氏に就き大に清樂を修め遂に其妙を極む、技非凡の稱あり、近代貴顯の夫人中博能の令閨少なからず、然れども清樂に於ては夫人に匹敵するものをみずといふ。

高橋健三と其夫人

高橋健三君の夫人は素と東京の生れなり、初め柳橋に在つて都一廣と稱し、一中節の師匠たり、美聲全都に高し、夫人高橋氏の俊敏長く地に在るの人に非らざるを知るや、

力めて氏に嫁せんを希ふ、然れども夫人氏より長ずる事約二十、故に憚て敢て曰は
ず、私に補ふに徳を以てす、氏亦情誼に感じ、遂に懇風約成りて以て夫人の素志達貫
せらる、嫁してより後數年高橋氏花柳の間に豪遊し、流飲連日に及ぶ、夫人其非を説
いて大に之を諫む、氏悔悟しその鍾愛せし校書を遠げんとす、然れども其校書又之に
應せず、手切金數百圓を要求して止まず、氏又其所置に苦しむ、夫人之を知るや、直
に微行其家に至る、校書夫人を見て其舊師なるに驚き嬌辭言を極めて之を迎ふ、夫人
之を問流して曰く「妾今越後屋に趣て新衣を調せん」とす、卿俱に來れよ」と、卒ひ
て直に三井に至り、自ら幾種を購ひ又顧みて曰く「卿若し望む處あらばよく述べよ妾
購ふて之を呈せん」と、校書纔に半襟一片を撰びて之を取る、夫人微笑して曰く「卿
何うケチなるや、と自ら七珍一卷價數十圓のものを取て之を與ふ、歸るの後校書夫人
の翰に接す、披けば即ち手切状なり、校書啞然遂に之に従ふ、夫人の頓才驚くに絶え
たり、居常最も交際に熱して、よく人に接す、然も氏に仕へて琴瑟和合す、氏の後

に官報局長となるや、夫人氏の門下を慰り、大に其敬する處となる、亦女傑たるを
失はず。

神鞭知常と其夫人

前法制局長兼内閣恩給局長從四位神鞭知常君は丹後國舊宮津の藩士、嘉永元年八
月を以て與謝郡に生る、明治二年八月宮津藩の宣教師となり、同七年十二月公務を帯
びて米國に出張しヒラデルフィア博覽會御用掛を被命、大藏農商務等の書記官を經、
今や代議士となりて憲政本黨總務委員たり、君が性は一異風にして其家庭たる和氣肅
々として其親しき事他に其比を不見、君が夫人は實に温和にして慈愛の心深く子女四
人を教育して常に順良に之を薰陶し苟も鞭打を加へず、其頭を撫で之を訓す、
又頗る内氣にして節約、氏に嫁してより僅に歌舞伎を見し事兩三回のみなりといふ。

大石正巳と其夫人

前農商務大臣大石正巳君は米國仕立の頭腦を以て克く當時の政界に雄飛し、遂は憲政内閣の成立せらるるや、農商務大臣に被任正三位に累進す、君は性頗る義侠心に富めるの處あり、嘗つて犬養氏君を評して曰く「君は世間では女にかけてばかり剛い者とのみ思つて居るが却て左様でない、君は何事にも堅忍な男で自由黨組織の當時君は實に裸體一貫で奮走し下宿屋で朝と夕との飯を澤山食ふて煮飯ぬきで働いた」と、之れ眞に君が實状を評せしものなり、君の夫人は此間に在つてよく貞操淑節常に君が行爲を補し、時に或は非常の失態を帷幄裡に葬られんとせしを全ふして遂によく今日に及ぶ、又好聞たり。

河野廣中と其夫人

今日我政海に於て尙も政客の本領を有し陰然黨の内部に在て献策宜敷を致し、其一度政敵と闘ふに當てや、雄辯滔滔々克く時勢に乗じて活機を制し、社會に天下に正々堂々直言直行して以て之に臨み身は清廉を首として自ら任じ敢て校漢黠怪の徒と席を同ふするを喜ばず、其堂内に於て首袖の地に在るや、活動的手腕に乏しと雖も然も克く其統一を維して強固漸進の態度を執り、宥々乎として事に當る君子的政事家として余輩の目すべきもの夫れ君を措て又何人かある。

廣中氏は舊三春の藩士なり、嘉永二年七月を以て生る當時に的りて幕府政機を失し、天下騷然各地至る處尊王佐幕の論起る、君此中に在て人と爲り、幼にして英邁、事に中つて克く堪ゆるの氣骨あり、長ずるに及んで愈々堅く、夙に勤王盡忠の大志を懷き汎く名士偉傑の交を結ばんとす、降りて維新の變役君が藩又官軍に、抗して力戦す、

君之を觀るや憤慨措く能はず、百方藩の知士に其不可を説きしも遂に納るる所となら
ず、茲に於てか君斷然藩を脱して官軍に屬し其手の參謀板垣退助氏の幕下に伍し砲煙
彈雨千軍萬馬の間に身を投じて頗る盡す處あり、役平ぐの後郷里福島間に出任す、然
りと雖も當時維新改革日尙淺く封建時代の舊習未だ脱せずして抑壓賤昧、官尊民卑、
弊風改まらざるを慨し、意を決して遂に其職を辭す、夫より君専ら心を自由民權の擴
張に盡し、有志と共に相計りて愛國社を創設し、自ら其衝に當りて操觚最も力む、降
りて明治十六年三島通府縣令となるや、縣民其虐政に激昂し縣内擾亂麻の如く其底止
する機を知らず、此時に當り君之を傍看するに忍びず有爲の士、俱に四方に奔走して
其和鎮を計り擧げられて總代に推られ大に其難局に當りしも遂に縣民の意を貫いて圓
満の運に至る能はず、君茲に於てか政府の壓制を憤り、郷黨と共に大に爲すあらん
と期せしも未前にして國事犯に觸るる處となり、遂に獄に下さるるに至る福島事件即
ち之なり、政府此時に於て始めて高等法院を東京に開き之を裁決す、實に我邦高等法

院開始の嚆矢たり、君刑を受けて獄に在る事前後七年の長きに頻る、明治二十二年二
月十一日憲法發布盛典に際し、君亦大赦の恩命に浴して出獄の身となる、翌二十三年
より爾來常に郷里衆望の歸する處となり、毎回衆議院議員に當選し、明治二十九年第
七議會に列し精勵の功を以て銀盃一組を下賜せらる、
君身を政海に投ずるの始め籍を自由黨に置きしが三十一年去つて憲政本黨に加入し總
務委員となる、君亦明治二十五年第三議會に於て明治二十五年度歳入歳出總豫算追加
案の兩院協議會に附せらるるや、時の議長渡邊洪基氏等と共に之が委員として最も盡
す處あり、爾來院内に在つて名望衆に越ね常に一方の重鎮たり、又當代政事家中偉君
子と稱すべし、君の夫人は夙に佛教を信じ又淑徳の聞に高し、君の福島事件にて入獄
の身となるや、夫人孤閨を固守し確く貞操を全ふし、收入として他に一物もなきの間
に在つて克く君が出獄に至る間の家政を保つちぬ之實に夫人が堅忍不撓の力にして世
に賞せらるる基なり。

菊池文相と其夫人

新文部大臣正四位勳三等理學博士菊池大麓君は現今明治文學界に其名の重を置かるゝと共に又一方に於ては政界に其隻手を伸ばし克く時極の如何を洞察し今や桂新内閣の組織せらるゝや、即ち拔んでられて以て大學總長より遂に文相の椅子に上るに至る、君は其以前英國に留學を被命ケンブリッヂ大學を卒業し學位を受く、明治十年東京大學の理學部教授となりしより以來文部々内に在る事實に二十有五年、然も一日の如く國家に力を盡さられぬ、君が如斯く國家に盡せらるゝ所以のものは其夫人が常に内政を親理し以て君が内顧の憂をなからしめしに依るなり、夫人の力又大なる哉。

山田眞南と其夫人

眞南山田喜之助君は正五位法學士と云ふ肩書の外に辯護士且つ代議士たり、君は常に

心を國家に注ぎ、荷も大事急件あれば献策せざるなく、其官に就き又は其野に降るも常に一身上の私に出でし事なく、必ず慎重の態度を保ち以て國家と共に其利害を同ふす、君遂に法律を以て其専門とし其大學を卒へて學士の稱號を得しは實に明治十五年なりき夫より後十八年司法省權少書記官となり參事官に進み判事檢事を歴三十年十月衆議院書記官長となり、同三十一年司法次官に累進す此年三月君衆望の推す處となり府下の第三區より選出せられて代議士の職に上る。君又法律の外政治文學の識あり、其著す處亦少なからず、君は性頗る淡泊、苟も人に接して驕誇の色を出さず、而して輕快たる中に又温厚の風を備へ、一見寛仁たる大度の程を人に知らる、而して一朝事あるの時に當ては英斷果缺銳刀を以て亂麻を切るの感あり、君の夫人は岡松麿谷翁と稱せし儒者の令嬢にして頗る秀才英慧の聞へあり、克く君を助け以て其務を全ふす、君は元來詩才あり而して又一般詩人のくせとして家政を顧ず、頗る磊落の氣風あり、然るに夫人君に仕へて貞操克く内政を理し一として毫も君が願見を要せしめざ

るに務むるに至ては亦驚くの外なし、夫人亦學才あり、慈善博愛の心に富むるにふ。

伊藤芳次郎と其夫人

伊藤芳次郎君は栃木町の豪商にして、明治の初年に於ては實に砂糖の小賣營業を爲す然るに今や其財數十萬圓の巨額に至り縣下屈指の金満家たり、君の令閨は夙に賢婦の聞え高し、其始め君や僅々數圓の資本にて商賣に従事し以て今の營業を始めたり、其當時に於て亦夫人亦辛苦困難を凌び、百折不撓の堅心を貫き夫を勵じて以て今日の富を致せしなり、君が地方に於て、釜芳と稱せば必ずや其令閨の事を口にせざるものはなし、殊に令閨は客を引く事に妙を得、其帳場一切の事を自ら行ふ、君今は銀行を創立し傍ら公共事業に力を盡せり今や其富名赫々たるに至りし所以のもの皆令閨の力與て効ありし故なり、又賞するに足らん乎。

清浦法相と其夫人

司法大臣正三位勳二等清浦奎吾氏は嘉永三年二月を以て生る熊本縣の士族なり、明治の初年埼玉地方に至り小學教員たりし事は、其當時世人の皆知る處なり、此君が今や司法大臣として敬すべき地位に昇られしは又所以無きに非ざるなり、君は明治の六年埼玉縣出仕となり、夫より司法部内へ身を投じ、又内務部内へ入りて警保局長、内務大書記官等に至り、次で再び司法次官より遂に法相に昇進せしなり、君が此間に於ける其夫人の行爲は如何にと云ふに克く君に仕へて貞操實に無比と稱すべく又君を勵めて其徳行を助け常に内政に力を盡して以て今日に至りしなり又偉なる哉。

正親町伯爵と其夫人

埼玉縣知事正三位伯爵正親町實正君は舊公卿にして安政二年六月を以て生る、文久二

年侍従職となり、明治十二年以降宮内省御用掛を拜命す、伯又藥學に長じ侍醫局出仕製藥掛を歴て藥劑師たり、貴族院議員たる事二回亦衆人の推す處となりて現職に在り、伯の夫人は博學にしてよく糸竹歌麩に秀で徳操の名あり伯が名族として世に立つの間よく之を助けて以て其内顧の憂慮なからしむ、又評を憐む事極めて深く、常に奴婢侍人を愛撫して訓陶す、然ば家人又皆夫人の徳を稱賛するに至る、尙風夫人の如きは以て世の閨閨の好模範と爲すに足るべし。

平岡浩太郎とその夫人

福岡縣第一區撰出代議士平岡浩太郎君といへば何人も其九州嶺山王として又憲政本黨の金庫として商界に亦政界に其偉名を擴めつゝあるは世人皆之を承する處、其君が始めは維新改革より西南戦争の間身を千軍萬馬の中に置き遂に賞典祿を賜はるに至りしと云へば軍人的事歴に似たるも、君が度量已に百折不撓の膽据りて居る故にして敢て

怪しむに足らず、君今より十數年以前僅に金二十兩を懐にし、赤池に至つて鑛業に従事し掘り當てゝ以て今日の富に及びしと云へば世人又大に其好運に驚くならん、君は嘉永四年六月二十三日を以て福岡地方に生れしなり、君が前半生は鑛業より出で政事家となり、又鑛山業に返りしが明治二十七年日清平和破れしより以來又風雲に乗じ其三區より擧られて中央の政機に參與す、降りて三十年松隈兩伯の間に斡旋し遂に其聯合内閣を組織せしめぬ、爾後政黨の變遷につれ今は憲政本黨に籍を措くに至る、君が此幾年の間在つてよく世に處し、政界に奔走するを得しは即ち君が家に在つてよく其内政を理辨し、君をして毫も其財政より私交迄眷顧の憂なからしめたる君が今夫人の在りしが爲なり、世人君が偉業を賞すると共に之が内に在つて君が諸事を補助せし夫人が功は決して忘るべからざるの價値あり、又世の夫人たるもの大に奮起せざるべけんや。

富澤憐之其夫人

富澤憐君は前警視として最も世に知られし人なり、君の令閨は風姿頗る婉妍、柳腰花顔又以つて美人と稱すべし、學識高くして聰明なり君が職に在るの日や公務非常に多忙を極め其家に在らざる事極めて多かりき、夫人此留守に在つて如何なる事件出來するも尙克く自ら之を處辨して決して君の内顧を煩はさず、又常に君を勵して曰く公務は寸時も之を等に附するべからず妾不肖と雖も又内に在り、家計は勿論私交上に至る迄必ずや君が配慮を煩はすに足らず君夫れ心を安んじて可なりと、今や君病を以て職を辭し、身を閑地静養しつゝあり、夫人爾來君に仕へ貞操最も高く、常に上流社會に出入して大に交際に力む、又糸竹絃琴に妙を得て活花、裁縫の道に至る迄一として知らざるなしといふ。

岩倉公爵之其夫人

爵位局長兼侍從職幹事從二位勳一等公爵岩倉具定公は實に岩倉右府の御嗣君なり、嘉永四年十二月を以て生る、夙に泰西の學に志し歐米に在る事多年、明治の初官軍に將として白河口の總督たり、侍從大膳大夫、學習院長等に歴任する實に名門中の人物たり、公の夫人は淑徳博くして貞操亦堅く威ありて猛ならず、眉宇秀で温厚の内克く人を服せしむるの風あり、其博學にして美行善績の多き古來又其比を見ざる處公にして此良夫人あり、亦好配と云ふべし。

松平正直男之其夫人

松平正直君と云へば人は皆其研究會員に非ざるも清浦法相等と共に常に研究會と氣脈を通じ傀儡自在の間に立つて居る人にして又山縣系のチヤキ一連なる事を知ら

君は正三位勳一等と云ふ立派な肩書を有し、錦鶏間祇候、北白川宮家務監督として又貴族院勅撰議員なり、弘化元年二月の生れ、本年年齢五十八歳なりと云ふ、その官海に入りての事歴は大書記官、縣知事より内務次官迄昇られし人、君の夫人は頗る博學にして又才智あり、常に山侯系の政客の間に入りて巧に交際を爲しつゝあり、又義侠心に富み専ら貧人を救助せし事少からず、夫人又常に世の閑聞たるの模範として自ら任じ居れりぞぞ。

大岡育造と其夫人

伊侯が政友會に於て經濟委員の代議士として、將非凡絶比の好辯護士として、偉名現代に輝々たる、中央新聞社長大岡育造氏は安政三年六月を以て長門國豊浦郡小串村に生る先考を尙齋翁と稱す、醫を以て業とし又俳句を好み頗る秀吟あり、就中「椎の葉」なる著集の如き最も斯道の愛賞する處なり、君は其長子にして夙に家學を繼がんとす

るの志あり、明治六年癸亥を負ふて長崎に遊び長崎醫學校に入りて専ら獨逸學を究攻す、翌七年征臺の役起るに及んで本校の廢せらるゝや、君蹶然起つて驥足を法曹社界に伸さんと欲し去つて東都に上り、學に就く偶々君脚氣症に罹り病を養ふて埼玉に轉療し遂に其地に留つて教鞭を執り在る事年餘、機を得て再び東京に出で法講學館に入りて法律學を研究し更に進んで司法省法學校に通學大に其蘊奥を極め明治十三年遂に卒業代言人となり、汎く訴訟事務に執掌し、奇腕先鋒を凌いで名聲都鄙に鳴る、其擔當の下に關與せし有名なる事件を擧ぐれば日報社長福地源一郎氏對組合代名人名譽回復事件、大阪自由民權懇親會場櫻間要三郎殺人事件、大阪事件、花井阿梅謀殺事件、秩父暴徒事件等及び一時世に騒々たる相馬事件等あり、君明治十六年東京府會議員に擧げられ又郡部會議長等の公職に上りし事數回、降りて明治二十三年帝國議會の新設せらるゝや、君郷里山口縣第三區より衆の薦す處となりて衆議院議員の候補者となり選に當りて茲に

代議士の榮職に登る、越えて同二十五年下院副議長に擧げられ明治二十五年歳入歳出
總豫算追加案の出するや君之が協議委員となりて貴衆兩院の間に斡旋し遂に其修正に
議決す、同年十二月辯護士法案に就き君又議長鳩山和夫氏等と共に上下兩院協議會に
臨み大に其大意見を陳述す、立論正々論鋒堂々流暢として衆の耳を聳たしむ、爾來各
種の委員部長等に推されし事毎回常に院内の一々客勇將として重きを置かれ延て第六
議會に至る、偶々西郷侯の國民協會を組織するや、君亦之に賛同會長の候と共に奥
羽北越の各地に遊説し頗る黨勢の擴張に献身し東奔西走爲めに席暖なる能はず、亞
で今の中央新聞社を創設し盛に新紙を發刊し、君自ら牛耳を執つて操觚を主幹す、明
治三十年十二月二十五日第十一議會の解散せらるるや、翌三十一年三月君又郷黨の擧
ぐる處となり、再び選に當り中政に參與す、同年六月再び第十二議會解散の厄あり、
其八月之が臨時總選舉あるや又々出で當選し年を閱して今日に至る、是より先き君
夙に泰西の事情を洞察せんと欲するの志ありしも政務多忙遂に其途に就く能はざりし

が一昨三十二年閑を得て歐米諸洲の各地に漫遊し、汎く諸般の事物を詳察して歸朝す、
爾來伊侯と俱に政友會に籍を置き大に獻策する處あり、
君資性濃厚篤實にして俠氣あり、又頗る孝心に深く本年六月父君の逝去せらるるや力
氏と共に郷に歸り篤く之を吊ふ郷人皆其孝を稱す、
君の夫人は實に君の篤行に並ぶの徳ありて、慧才智敏の上に又頗る義俠の志あり、
世人は大岡君の代議士たるを知れるも其夫人の高徳は未だ多く知らざる人あらん、好
事門を出ずとは即ち之なり、然れども夫人が積善何んぞ永く現はれざらん余輩の今茲
に録して世人に其徳を知らしめんとするが如き即ち是なり。

平田農相と其夫人

農商務大臣從三位勳二等平田東助君は夙に泰西の文學に志し歐國及び獨逸に於て大
に學ぶ處あり、君は舊米澤の藩士にして嘉永二年三月を以て生る年齢合正に五十有

四歳なり、君明治三年大學南校大舎長となり、十一年大藏兼大政官書記となり、爾來參事官書記官長より樞密顧問官に至り、法制局長兼内閣恩給局長となり、尋で今や累進農相の顯職に昇るに至る、吾人は君が偉名の高きと共に君が夫人の偉誠を推して其美德貞操を大に賞讃し世の閨閤に知らしめんとす、夫人は君に仕へて貞に常に家を守りて君が公務多忙の時に當り之を幫助し以て今日に至りしなり其積徳亦筆紙の盡す處に非ず。

西郷侯爵と其夫人

海軍大將 正二位勳一等功二級侯爵西郷從道君は天保四年の四月の生にして本年丁度六十七歳に渡せられ、君が性來の好人物として何れの内閣に在つても決して衝突せずよく常に閣下に奉じて翼贊の任に當るは實に吾人の敬服する處なり、君が此好人物たる其技量を助けて以て現時に於ける政軍兩界に重珍せらるゝ其内輔は實に君の夫人の

力なり、夫人は前印刷局長 得能良介君の女にして君に嫁してより男六人、女四人の御子を擧げられたり、夫人の資性温雅にして然も博學徳高として慈善に志し深く目下上流社會に於ける博愛者を論評する者必ずや夫人に賞辭を呈せざるはなし。

岩村定高と其夫人

岩村定高氏は其當時多少政界に名の知られし人なり氏に就て面白き諸談あり、それは丁度今より五年程前の事にして大隈伯の邸に於て君と相良剛造氏と碁を圍みぬ、偶々今の愛知選出の代議士兒島惟謙氏側に在り尤も岩村氏の碁相良より強き事約六七目然るに兒島前に岩村に敗れしを含み、其負けし腹癒せとして頗る相良に助言しぬ、岩村其の大に苦められしに立腹しヤツキとなり、拳を固めて以て兒島の頭を擲す、兒島大に驚けども素と自身の出過により、苦笑以て其席を退かんとす、然るに岩村尙怒り不退、躍りて遂に再び鐵拳を兒島に呈しぬ、彼も茲に至り大に怒り、むじり掛つて全

く一場の騒動となりぬ、一方は當時チャキ／＼の岩村、向も嘗ては大審院長迄務め、
從三位勳四等と云ふ肩書迄貫ひし事ある兒島なれば、如何な聞かばこそ、盤倒れ、石
飛び大に亂痴氣騒となり、之に驚き大隈夫婦漸く仲裁に入り辛ふじて静めしが、夫よ
り後晚餐の膳に向ふや、兩人いつしか中直りとなり、顔見合せて互に苦笑、コブを撫
でつゝ、「年甲斐もない事をしたのう」と茲に和談なりて今日の騒動、此喧嘩は互に決
して他言せまいと云ふ約束をなして、機嫌よく酒を酌み替せ、宴は無事に納まりて、
岩村に於てはやがて家に歸るや、ソコ／＼に寢床に這入り込みて眠に就く、時に君の
妻君は其様子を見て頗る變に感じぬ、勿論君の妻君は却々人に負けて居る等の事を好
まず、常に政客名士の間に在つて巧に處世の時論を争はし、老功政事家も亦跣足にて
走る辯才ありければ、之は大に譯ある事とし其夜は何事も言はずして終りぬ、果せる
哉、翌日に至り君が顔を見るや、頬面や襟元等に瓜の跡、掻き撈り等ありければ、是
れてつきり昨夜赤坂あたりの待合にて、君がなじみの校書と眞猫遊びの果が痴話とな

り「エ、い、い、い、い」か何かにて撈りつかれし事と即座に早合天して、「鳥渡もしあな
御前さんは」と一本例の文句を並べられて君に極めつけられれば、流石政界に入りては
堂々幾千の反對黨にも自若として少しも動ぜぬ君も之には大に閉口し、遂に約束を破
りて昨夜の事件を逐一白状に及びぬ、是を聞きし君が細君は「ヤ、ヤ、ヤ」の百萬遍、啞然
其の可笑さに開いた口も閉がらざりしと云ふ、爾來蘭君と云ふと必ず、細君は其不贅
成を唱へる、そりな、是れ即ち細君が忠實なる處にして内心君にけがにてもありてはと
心配するなりと云ふ、筒様に妻君は却て親切な人の宜しき質にして又頗る義侠心に富
み、常に幾人かの書生を勞りつゝありしといふ、實に當世秀閨の一人たるべし。

元田肇君と其夫人

衆議院副議長法學士元田肇君は單に政界に於て、然も政友會に於て其重きを置くとの
みの人物にあらず、現在の辯護士中最も長く斯業に従事せられし老巧者なり、君本姓

は猪俣氏大分縣豊後國東國東郡の人にして安政五年正月來浦に生る、年十一歳出で元田竹溪氏の門に入りぬ、息直氏の知る處となり、其娘を配とし遂に元田氏を冒す、夫人亦貞賢にして徳操堅く淑行高し君に仕へよく貞に、君の明治五年開拓使學校に入りてより十三年大學を卒へ法學士の稱號を受け、以て克く政界に雄飛して今日の地位に至らしめたるは、實に夫人の力興つて効多しと云ふべし、又特筆賞讃の價値あり。

中村元雄と其夫人

從三位勳三等中村元雄君は前内務次官として其當時世に知られし人物なり、今や身を閑地に養ひつゝある君は舊日田藩士にして天保十年九月を以て生る、君は元來園藝に巧にして其手際は遙に段を越ゆる事數等なり、君の夫人は英才ありて世事に明るく、家政を治する事最も妙嘗て氏の獨逸、フランス等へ差遣せられし留守に在つて、よく

自ら孤閨を守つて内政を全ふし、今や弘く慈善公益の事業に力を盡し、以て其務めとせられつゝあり、夫人の徳年と共に揚り近人の畏服する處となる。

天野爲之と其令閨

天野爲之君は明治學界に於て然も一方の老將として、世に名を博しつゝある學者なり、君は却々健腦にて頗る善い頭を持ち居らるゝの人にして、今時のペイペイ學者間に大に畏服せられてあるも、亦其蔭なり、君の夫人は英明にして和歌を善くし、又書に秀でらる、就中假名文字に至りては其最も得意とする處たり、先年氏と共に北越地方に巡回せられし事あるや、一日新發田に至りし時、爲之氏偶々地方の豪農の願望する處となり、遂に和歌の揮毫を諾す、依て先生茲ぞと忽ち筆を執り、眞面目となりて之を走らす、時に坪内逍遙氏亦君と行を同ふして其席に在り、傍らより冷評して曰く「假名文字は君よりも令閨の方がツツ巧手ね」と笑へば、君亦平然之に對へて「ウン

妻の方が「儲け巧手だ」と云はれしに之を聞きし逍遙氏も、亦啞然として二の句が出でざりしといふ、元來君は細君尊敬主義と云ふにてもあらざるべけれど、却々やさしい方らしく、細君は亦君に仕へて順良温厚にし一家よく和し、團樂祥氣驟々たりと云ふ、君の閨閣として此夫人ある誠に好偶と稱すべし。

高田慎藏と其夫人

高田慎藏君は貿易業者中異数の商人なり、吾人は高田商會なるものを知らん之れ即ち君が主宰する處のものにして近時我貿易業社會に於て實に一方の商傑として重きを置かれつゝあるなり、君が夫人は頗る機敏才慧にして商人的氣風を有し、殊に其行為に於ては男まさりの志あり元來貿易事業と稱するものは巨額の金を要し、且つ相場、經濟の道に明通するを要するなり、然るに君は此時機に投じて以て今日あるを致せしものなり、然も君が此好運に至りし所以は實に其夫人の力による多し、夫人は内

に在つてよく一家の内政を自らし外に出で克く商海の事情を洞察し以て君に翼參する處少からず、推想せば實に夫人の秀才なるかを知られん、殊に此夫人に就て好話あり、現に本郷の湯島天神町に建築せられし別宅あり、實に高壯美麗にして一見其貴顯名士の居室と見らる、而して此別邸を新築する以前に君は商用を以て外國に在り、然るに夫人は君の洋行中其命を受け今の別邸建設の計劃に付きそが一切の事を自ら司り以て落成させしめしなり、偶々主人の君は洋行中より歸り、夫人より其話を聞き翌朝夫人と共に輛々車を飛ばして其別邸の新築を見ぬ、夫人進で其設計の詳細を説明し、又餘す處なし、君之を見て其壯麗に一驚を喫せんとせし程なりといふ、實に其敏腕健腦又讚すべきの好夫人なり。

三宅雪嶺と其夫人

雪嶺三宅雄次郎君は文學博士として現時の文壇に發立し、然も非凡の天資は常に群雀

と伍を等ふせず、屹然衆を壓して、頭を抜でし孤鶴の觀あり、其一と度筆を執るに當てや、數萬言の長論連譜瞬時に成り、字々句句皆金玉、實に其健才絶倫計り識るべからず、刻下の斯界又其匹儔を見ず、君の夫人は明治女流の小説家中其美名赫々たる花圃女史となす、女史本名は龍子、田邊太一氏の女なり、明治三年十二月を以て生る、夙に才媛の名あり、年爾めて七歳出で跡見女學校に入り、降りて二十一年高等女學校に進み大に敏名を博す、同二十三年拔群の成績を以て卒業し、後雪嶺氏に嫁す、女史資性優雅、親に仕へて克く孝に、兄に事へて克く悌に、幼にして筆墨を弄するを好み、長ずるに及んで稗史小説、又は落語話等を愛讀す、故兄の嘗て英國に在るや、女史常に文詩歌翰によせて本國の風光山水を叙し便に托して郵送す、亦夙に和歌を嗜中島歌子に就て大に修む、女史十一歳の頃嚴君偶々渡清の途に在り、時將に初春、庭前の梅花蕾を破りて笑ふあり、女史乃ち父君が羈情を慰めんと欲し其影を寫し併せて之に和歌一首を添へ以て送る、其歌に曰く

外つ國の春日やいかに長からん

見せまほしき庭の梅が枝

と其父君を懐ふの情や大に掬すべし、女史此時に於て既に絶比の健才あり、今日に至つて偉名を博す又宜なる哉、其御歌會に侍して詠進せし秀歌亦頗る多しといふ、今其一二を摘して讀者に資せん

○春 夕

春雨はあられに成りて紅の

雲こそ句へ夕暮の空

○一鳥過寒流

北風の寒き朝に隅田川

さかのぼり行く鴨もありけり

而して女史の小説界に頭角を顯はせし其初陣の作は即ち籤の鷲を以て首とす、句調

流暢、意味深遠大に世の喝采を博す、爾來君に仕へて貞操愈々堅く琴瑟相和し、淑徳大にあがる、又雪嶺氏は頗る圍碁を好み、上野玄光院に長生會と稱する會を組織し同好の詩人、桂湖村、國分青厓其他三浦梧樓、陸羯南、松永丁軒、磯野徳三郎、の諸氏黑白を闘はして以て快となす、其打ち方たるや、頗る奇、軽く石を持つて其盤目の上にチヨット置くにて殆んど碁を打つと云はず、之を置くに稱する方適評なるかを覺ゆ其狀又滑稽なり、然れども彼の將碁界の泰斗と稱せらるゝ小野五平氏の指方も亦如斯なりと、然し乍ら其技倆と云へば……先づ筑碁連の少しく毛の生へしもの乎、呵々、而して君又大に菓子を好む其平常の嗜に充るは蓋し藤村のものを以て多しと聞く、頃日來女史舊師中島歌子の寓を叩く瀕なり、然れども決して長居せず、家人の「まあ今少時位は御話なすつて居ても良いじや、ありませんかと引留むれば、女史は其度毎に屹度「ハイ有難う御座りますが、ちと本郷の方へ廻ります故これにて御暇を仕りますと、極つた如く云ひて歸る、然して女史が其譯をよく見聞するに、

小石川なる歌子の下より廻町なる自宅へ歸るの途序、必ず本郷の藤村迄わざ／＼廻り道をなし、そして夫君が大好きな御菓子を買い求め以てその留守番の御褒美に差上げのなりといふ、夫人亦家政の道に長じ、篤行の賞すべきもの多々、其美德女史の如きは蓋し稀なり。

田中正造と其夫人

鑛毒事件を以て現下の衆眼に政界の奇俠を以て目せらるゝ栃鎮、田中正造氏は、野州下都賀郡小中村の人なり、父を富造といひ世々里正たり、君は其男、天保十二年十一月を以て生る、幼名を兼三郎といひ、後今の名に改む、君年甫めて十九歳殿君が後を襲ふて里正となる、資性俠豪人の困苦を見るや即ち身を挺して之を助く、偶々領主六角氏政を失し重税を賦課する事妄甚なり、村民皆其苛政を憤激し將に大に爲すあらんとす、君之を袖手傍觀するに忍びず、衆に代て領主に其失政を詰責す、故を以て忽ち

激怒に觸れ其職を免ぜられ幽閉の厄に遇ふ後追放の身となるや大志を懐て上京し漢學を修めて大に造詣する處あり、降りて明治二年江刺縣に出仕す、偶々無實の嫌疑を以て鐵窓の下に呻吟する事六年、其青天白日の身となるや、幾もなくして縣會議員に擧げらる、時に縣令三島通庸の虐政に抵抗し殆んど數萬に上りし累世の財を抛て其運動費に供し、餘す處僅に家屋敷のみ然も後嚴父の永逝せらるゝや其醫に之を送る、茲に於てか、困苦最も其極に至る、此時に當て夫人自ら薪水の勞を執り、貞操願る盡し、夫人又自ら荒物店を開ひて業を營む、君然し此中に居して平然自若として事に屈するなく四方に奔走して斡旋甚だ力む、縣吏の君が反擧を妨遇せんとするや、君密に上京して警視廳に登り親しく苛政の狀を具申す、爲めに却て縛せらるゝ處となり獄に在る事八旬餘後赦されて出獄す、謂所福島事件是なり、夫人常に君に仕へて淑篤、君の捕へられて獄に在るや、辛酸萬苦の中に在つて克く君が出獄迄の家政を整理す、其堅忍不撓實に古今稀に見る處となす、往年足尾鎮毒事件の起るや、君憤然起て

是が救濟の策を促し柵鎖の名、大に世の知る處となる、宜なる哉、其被害民又君を目するに二代目佐倉宗五郎を以てし救生主と崇敬畏服せざるなし、其誠意熱心なるの奇行多く世に其比を見ず眞に奇客と稱すべし、而して君の克く此名をなせし所以のものは夫人の内助君をして憂願の患をからしめしに由るなり、又感ずるに足る、

青木子爵と其夫人

山侯内閣に於て外相の椅子を占めし、今の全權公使子爵青木周藏君と云へば、名前は青木なれど、人物は却々老練な外交官なり、方今海外に在る公使の中に於て、恐らく子位の腕を持ち居る者は蓋し尠なからん、君は永らく外國に在りしかば、萬事歐米風にやつて居る、尤も君の夫人が獨逸生れのものにてもあるならんが、君が往年外相にて在りし折、天長節に夜會を開き、君は一度外交官たりし者には悉く案内狀を發せしといふ、そは其歐米風を似ねたりしにて、其案内狀が又一寸風變りなりき

外務大臣子爵青木周藏、同エリエベツトと同じく並べて書しぬ、別に夫人とも何ともあらざりしに依り之を知らざる者は外國人の外務大臣が出来しと怪みたりと、勿論外國人は外務大臣等の夜會等に招待さるゝを、余程名譽の事と心得て居るにて、此夜會等にも出席せし人は本邦人より外國人の方遙に多かりしといふ、一昨大年隈伯の外務大臣兼務にて、鳩山博士、其次官たりし時は、却々運動して出席の榮を得たしと騒ぎし連中も多かりしが、此時は夫人が獨逸人程ありて、何事にも頓着なく、招きし故、以外な盛會に及びし由、夫人は大に邦風に化し、頗る明敏にして活達、大に見るべきの徳ありといふ。

新井代議士と其夫人

新井章吾氏は栃木縣選出の代議士にして政友會議員中名聲赫々たる政客なり、君は栃木縣の人安政三年二月を以て下野國都賀郡に生る、家世々農を以て業とし夙に地方の

豪族たり、夫人はつね子といふ、故江藤新平氏の女なり、幼にして才媛の名聲聞に鳴る、夫人の君に歸するや、君時に年齒壯盛、堅く民權自由の持論を主張し廣く天下の政客と相語り東奔西走席暖なる能はず、自ら財を投じて以て素志を養ひ、身荷も自由の爲に倒る鴻毫よりも輕きに居し其主論を固執して動せざる事泰山の如し之を以て家財日に傾き終に妻子をして餓渴に迫らしむるに至るも、然も君依然恬として、少事に屈せず、夫人此内に在つて常に能く家を治め財政を理し萬苦百難に會して之に撓まず、弱手能く之を排して其任に堪ね、君をして政界雄飛の間亦内顧の憂なからしむ、氏茲に於て、其志愈固く博く衆士を愛撫し篤慈最も盡す、故に郷黨皆君が徳行を慕ひ名望一身に集り、榮譽を雙肩に負ふに至る、君此時に當り今の遞信省書記官土居通豫氏等と共に東京に於て北辰社と稱する政社を起し、又中江篤介氏等と共に平等經倫雜誌を發刊し、東海曉鐘新報に筆を執る、偶に君が言論激に失し忌諱に觸るゝ處となり遂に獄に下さる、後出獄するや、倍舊益々自由の爲めに斡旋す、明治十八年

三月稻垣示、大井憲太郎、小林樟雄寺の諸士と俱に大に成すあらんとして中途官の
覺る處となり佐賀に縛せらる、大阪事件即ち是なり、此時に當り夫人孤閨を守り空居
を衛る事五星霜其間や酷苦辛酸言ふべからざるの悲愁あり、然れども之に臆する處な
く君が出獄に至るの留守を治めて以て其本務を全ふし、爾來君を幫助して、以て今日
に至る亦偉丈の女流に非ざれば何ぞ將に斯の如くなるを得んや、世人の新井氏を口に
するもの必ずや、談夫人に及ばざるはなし、是實に夫人の凡ならざるを證するなり、
素より一斑を以て全豹を知るを得ず以上記する處單に夫人が偉行の萬一に過ぎず嗚呼
亦賞するに餘りあり。

佐々木伯爵と其夫人

伯爵佐々木高行君の夫人は名を貞子といふ幼にして其敏學才衆に秀づ温厚にして淑徳
あり、佐々木氏の家は世々山内侯に仕へ祿百五十石を賜はる、然れども父祖の代より

慈善に心を盡し財を分つて貧民に與へしかば、伯の代に至り家政大に宜しからず、得
祿皆負債償却の資に供し、家に擔石維柱の財なく、邸床破れ、軒戸壞るゝも亦邊幅
を修めず、日々買ふ處の味増僅に四文、近人之を綽號して佐々木の四文味増と稱す、
然れども燕雀何ぞ大鵬の志を知らんや、伯此内に在りて意となさず、首め夫人の伯
に嫁するや近親其貧しきを見て遜色あり、夫人獨り伯の敏邁必ず世に出づべきを信じ、
赤貧の間辛酸を嘗むるも屈せず、伯に仕へて貞淑鳳鸞相愛し伉儷極めて厚し、伯素行
磊落古今の奇士たり、毎に黃白の値を知らず、清貧親ら甘んじ、専心讀書を事とす、
然れば家政新書を讀ふの裕なきを以て往々筆紙の料を缺く、夫人之を憂ひ日夜人の爲
めに綿を紡ぎ坐々たる暗燈の下終夜得る處の賃金僅に數錢を以て之に充つ後伯天下の
風雲に乗じ累進して今日の顯職に昇る、此間夫人家政を執る胆勉伯をして内顧の憂な
からしめしもの興つて以て力ありとす、夫人伯より若き事八歳其徳望は星霜と共に彌
高し、方今伯の財富同族屈指の巨額に至りしを以ても、夫人が平素の行爲、其儉節に

して家事に意を止むるの如何に深きを知るに足るべし。

有島武之其夫人

日本鐵道理事有島武君の夫人は舊南部津輕藩の留守居役加島某氏の女なり、幼にして父に分れ一に母堂の手に依て育せらる、偶々幕府政機を失し、天下恟然勤王佐幕の論到る處に起る、母堂此中に在つてよく二女一男を鞠養す、近隣其徳を稱し、賢貞孟母に越ゆと讃せらる、夫人名を幸子といふ、少にして聰明長ずるに及んで風姿 艶麗、小町を凌ぎ、紅顔細腰歩運をなす、故を以て顯門高家婚を求むれども、夫人未だ之を納れず母堂に請ふて上京し、大志を達せんとす、苦學最も力む、是の時に當り有島氏未だ名をなさず、位官尙高からず、先閨の良偶ならざらるを歎む、切りに善良の好夫人を求む、偶々幸子の賢名を風聞し鳳鸞約成て遂に夫人を迎ふ、氏任地に在るや、十年、よく上下朝野の間に居して處致宜敷を得、局に當りて最も熱誠なり、後遂に大

藏省國債局長となる夫人此内に於て家政を内助し、氏をして願憂なからしめしもの夫人の手腕賞するに足る、氏が二豎の襲ふ處となり、死に頻せし事前後數回、然るに常に夫人氏の爲めに藥餌の勞を執り連日衣帶を解かず病床の看護並に家事内政舉げて悉く親ら理す、近隣其の貞烈勤直に驚く、夫人また和歌に長じ博く名所舊跡に歴遊して吟咏せし長編の紀行和歌積んで山をなす然も字々金玉の聲あり、又頗る達筆にして筆勢非凡舞龍躍虎の狀あり又毎に絃琴に熟し、月明の夜一度之を彈せば、行雁飛翼を停め、松籟を生ずといふ、夫人の博技今古其匹儔を見ず。

松平子爵其母堂

從四位子爵松平信安君の嚴君は舊羽前國上の山の城主にして松平中務少輔と稱し三萬石を領す本年五十四歳に達せらる、夫人を直子と云ふ、舊御老中 小笠原壹岐守信康殿の姫にして今の子爵小笠原長成君の令姉に當せられ慧知幼より賢に頗る名媛の稱積々

たり、迎られて子の夫人となるや力めて内政の局に當り大に盡す處あり、氣骨俠心専ら弘く公益慈善の事に財を寄せ以て務めとす今や信安君家督を繼ぐ、夫人夫君と共に退て老後の樂を語りつく淺草永久町二十八番地の邸にあり、年齢五十四歳に渡せらるゝと拜承す。

久世子爵と其夫人

正四位子爵久世廣業君は舊下總國關宿の城主時の御老中久世大和守の嗣君にして五萬八千石の主たり前夫人は子爵松平信安君の叔母にして由子と申されけるが去る二十二年二月二十九日遂に先てらる、現夫人は從三位伯爵有馬道純君の長女直子の方にして本年三十三歳にぞ成られ給ふと拜承しぬ、婦徳堅くして子に仕へて貞に子女七人の教育を親らし家庭を治むる事殿にして弊に流れず緩にして弱に至らしめず、されば何れも皆な有望の方達のみなりとぞ、邸は本所區表町二十一番地に在り、子の名と俱に高

田中子爵と其夫人

子爵田中不二磨君の夫人は名をすま子といふ、嘉永四年名古屋に生る、家花簪を商ひ又多少の資財あり、父を花屋新兵衛といふ篤實の人なり、すま子故ありて校書となり、おさくと呼ぶ、絃琴の技に妙を得頗る全盛を極む、時に幕政振はず、諸藩皆兵を練り、私かに武氣を養ふ、此時に當り名古屋城内却て武威盛ならず、藩士多く文弱に流れ、輕衣繡服驕奢を旨とし、頗る唄踊に耽け口善惡なき童幼に雛侍の稱を蒙るに至りしかば藩の志士大に之を慨歎し精銳隊集義隊、鳳博隊、草薙隊、南群隊等を組織し、各々専心武術を習ふ、然るに皆其行動稍々粗暴に過ぎ多く父兄の意に納れざるものあり、田中子時に虎之助と稱し、小普請役を勤む、亦鳳博隊の一人たり、然れども家格ならず、粗服几鞘の綴刀を帶す、傍人皆之を冷遇す、すま子之を見て其不遇

を憐み又子の英邁終に大志を成功すべきを觀破し、私かに黃白を呈して之を内助す、爲めに父君の怒る處となるも聞かず、子丹羽順太郎君等と共に國事に盡走し維新の風雲に際して累進辨事參事となるに及びすま子を迎へて遂に令閨となす、人其の先見に服す、子後に司法大臣となり子爵を授けらるゝに至りしもの夫人の力亦大なり子の嘗て特命全權公使となりて佛國に赴くに方り私に佛國語の不熟なるを憂ふ、夫人此に先ち密に佛語を學び瑩雪の苦學此時已に大に進む、子に従ひて任地に到るや外人に接してよく語り子を助けて佛人の賞する處となりしとす、貞賢古今無比と稱すべき乎。

武富時敏と其夫人

吾人が呼んで紅木屋侯爵の名を呈する武富時敏氏は舊肥前佐賀の藩士、武富良橋氏の男なり、安政二年十二月、郷里佐賀郡神野村に生る、幼名を元吉といひ後謙之助と稱す君幼にして奇才拔群屢々父兄を驚かす、夙に大志を抱いて弱冠郷を辭し笈を負ふて

東上す、積學數年泰西の文を修めて大に力む、就中英語は其長ずる處たり業成るに及んで郷に歸り、専ら眼學に心を委ね、大に啓發する處あり、遂に明治十一年戊寅義塾を創設して弘く青年子弟の教鞭を執る、君時に年二十有四歳なり、降りて明治十四年身を政黨の間に投じ地方の名士政客と共に東奔西驅大に改進黨に盡し遂に其肥前支部の幹事となる、亞で十六年郷黨の推す處となり、佐賀縣々會議員に當選し其常置員となる、亞で副議長より遂に議長に進み、他員と共に縣内治政の局に當り之に盡瘁す越て明治十九年肥筑日報を發刊し躬親ら健腕を揮つて之が編輯を主幹し専ら操縦に協力す、次で翌年拔擢せられて佐賀郡の長となり職に在る事三年去つて又筆を肥筑日報に執る此時に當て政機改進し明治二十三年憲法制定と共に帝國議會開設せらるゝに至るや君衆の擧ぐる處となり選ばれて縣下第一區より之に當り、衆議院議員となる、降りて二十六年再び選に當り爾來毎回當選して以て今日に及ぶ、明治三十年四月松隈内閣の成立するや、君大隈伯の擧ぐる處となり、抜んでられて農商務省商工局長と

なり、正五位に叙せらる始め大隈伯の外務大臣として農商務大臣を兼ねるや、進歩黨中より君を推して商工局長たらしめんと欲し、秘書官早川鐵治を遣して君が履歷書を徴せしむ、早川氏は未だ君を知らず、心中私に君が進歩黨中屈指の驍名を耳にし以て大に其風采偉傑ならんを想像す、然るに君が紅木屋の寓を叩いて面談するや、實に紅木屋侯爵の名に耻ぢず其貴公子然たるの丰姿に一驚し更に其自若たるの間克く之に接して動せざるに啞然其柔弱局に當りて永く堪ゆるかを疑ふ、然れば氏當時君に心服せず後松隈内閣倒れ伊侯が憲政内閣起るや、君進んで内閣書記官長に昇り、從四位に叙せらる、時に早川氏内閣書記官として君が次に屬す、然るに君議會に臨み行政整理の難局に在つて克く其政務を處し滔々として毫も延滞せず、恰も銳刀を以て亂麻を斷つが如く、常に早川氏に囑するに各省の方針を調査せしめ身決して之に系せず、氏の獨腕に委す、氏以て其大抱負に驚く、偶々内閣會議の際、君時の遞信大臣林有造氏と議合はず、一事項に就て之に争ふ然も議論正々堂々として少しも非なく、時に或は

遞相を叱するの概ありき、早川氏茲に於てか始めて君が眞價を知りしといふ、之實に一小事のみ何ぞ一斑を以て其全豹を知るを得んや、君が神鬼出沒の奇才克く事に當て妙、機に臨んで譏、吾人をして其實力の極を知らざらしむ當世新進政客亦渺しとなさず、然れども奇才君が如きは蓋し稀なり、吾人の君を目して二十世紀の俊傑と爲す又過辭に非るべし、君今や職を辭して身を閑地に置く、君の夫人は夙に英敏にして淑徳あり、君に仕へて貞に、克く一家を理し君を内助して其内顧の憂なからしむ、亦夫人交際に巧にして、廣く閣臣政客に應接し、時事を談する快活、頗る令聞の名あり、夫人年齒尚若し後來益々其英譽を博する期して待つべきのみ、

井上勝之助と其夫人

獨逸國駐劄特命全權公使井上勝之助君の夫人は伯爵井上馨氏の女なり、學藝拔群にして然も神鬼出沒實に轟るべからざるの才あり、嘗て「レヂスフキヤ」を助けて鹿鳴館

に在り、高貴の間に周旋し奇敏意の外に出で積年の老商も又啞然たらしむ、偶々福地櫻痴居士意氣揚々室に入り辭を弄し、辯を巧にして歩々頗る愛嬌をふり撒く滿堂皆深窓の令媛貴夫人のみ、居士の爲めに赧然たるもの多し、夫人之を見て其鼻を挫き遣らんと寫真一葉を手にし以て居士を待つ居士夫人の側に至り將に得意の嬌辯を揮はんとす、夫人平然之を迎へ微笑を呈して曰く、福地先生頗る君に好物あり、幸に之を求め玉へと居士乃ち夫人の出す處を取り怪みつゝ之を見るに是れ實に氏が往年願情を呈せし日本橋芳町の校書「やつこの寫真なり、居士是に於てか心中大に愕然たり、然も力めて笑顔を作り夫人に其値を問ふ、夫人抜からず少々十圓にて差上げんと、居士再び其不廉なるに驚けども、室中數多の閨媛に其關係を吹聴せられんを恐れ、濫面遂に價を拂ふて之を購ひ歸りし事ありとぞ、夫人の磊落にして其頓才ある概ね斯の如し、又夙に泰西の文學に志し西洋的風習を賞す、曾つ今の代議士關直彦氏に其愛馬を送りし等又其氣骨凡にあらざるを知るべし、井上氏が外交官として其名聲高きと

俱に斯の歐洲的夫人あり實に良偶を稱すべき乎。

星松三郎と其夫人

府下第二區選出代議士星松三郎君は單に政客たるのみならず又實業界に於ても品川電燈株式會社専務取締役其外實に七八の銀行會社の重役を兼ねられ大に重きを置かれつゝあるの人物なり、君は素と宮城縣の生にして、陸前登米郡佐沼町の人、家は世々實業家なりき、後出で東上し、大に商界に雄飛せんとせしが、機執せず、仍て鐵脚奮然國內を悉く漫遊し、延て歐米各國に航し其實業政事を視察す、明治二十年歸朝し夫より市政に參與す、其職に在る事多年、遂に明治三十一年八月、臨時選舉に於て代議士となる、君の妻君は東京女學校の教師にして頗る秀才の聞にあり、校内に於ける生徒間の評判も宜しき方なりき、居常内政の術に巧にして、又君に仕へて頗る親し、君に歸してより以來幾人の子女を擧げられしが其教養は皆夫君一人にて所辨し居り、

夫人には毫も内顧の憂を致さず事なしと、而して夫人には専ら教鞭に力を盡させつゝあり、君は元來細君には親切の方にして却々注意周到なり、去る一昨年の天長節の折等は、君夫人と共に帝國ホテルの夜會に出席せしが、君は頻りと細君の處に種々の品物を持運つゝありしとか、人の妻と成つても斯く親切にせられるは實に幸福なる次第なり、之即ち君が夫人の徳高きの故ならん乎、呵々。

吉田熹六と其夫人

吉田熹六氏の夫人は從三位中島錫胤氏の女なり、活達剛邁にして頗る武藝に秀で劍鎗の技より薙刀鎖鎌の術に至るまで皆其玄妙を極めざるなく、又好んで六誦三略孫吳の兵書に曉通す、又淑操高くして大に義氣俠心に富む、曾て父君の勤王の義を唱へ志士と共に三條河原に尊氏の像首を刎ねたるが如き大に賛同する處なり氏に嫁するや、よく家政の任に當り理辨に長ず、氏の政客と共に四方に奔走するや、夫人家資少なきの

間に在つてよく之を幫助し、力めて儉素を旨とし家人を相戒めて曰く「驕奢は人を殺すの刃なり、秦王煬帝之を以て遂に亡ぶ亦大に勤むべし」と、自ら厨炊に従ひて酷苦其志節を更へず、常に内政の衝に當りて又氏をして顧憂なからしむ、氏の首藤陸三氏を助けて其選舉に當り仙臺に趣くや、辭を盡して之を勵ます、然るに氏二豎の犯す處となり、遂に藥石其功を呈せずして逝く氏の訃音一度夫人の下に至るや、夫人偶書齋に在り、絶到身を忘れんとせしが覺る處ありて町田忠治君と共に仙臺に至り、遺骸を抱いて涕哭殆んど寢食を廢す、涙痕未だ干かず幽々たる君が新墓に向つて合掌低徊花を手向け、香を拈して以て其魂を慰む爾來堅く貞操を守つて益高し、力めて遺子の教訓に盡し、以て老後の勤めとす、又女傑たるを失はず、剛氣徳操賞するに足らん乎。

望月小太郎と其夫人

パリストル望月小太郎と云へば、彼の廣告的の日英實業雜誌と云ふ盤行文字の主筆として、又歐字新聞の記者として、少しく吾人の眼に映じつゝある人物なり、元來君は却々歐文は出来る様子、君は流石泰西風の學を修めし丈けありて、誰にても其細君を紹介する、而して亦其細君は交際に巧にして言語明晰頗る英語に熟達されて、夫の小太郎君などより遙に上なりとの事なり、日本固有の女大學的的教育のみを受けし間未だに多き今日に於て、此夫人の如きは實に敬慕すべき秀閨たり、内地雜居の今になり、ABCをも知らざる婦人、十中の過半もあるの現時さりとは、又よく學びしものと賞すべし、夫人自らよく内政を理す、苟も弘く外國人を驚かす程なる大事業を遣付んと爲す者は必や此夫人の如き當世風、即ち洋風の好夫人を娶れ、徒らに眉宇の如何をのみ撰ぶは實に愚の至りなり、夫人又英例にして婉麗、天晴好閨たるの價値あり、

中久木信順と其夫人

中久木信順君の夫人は清子といふ舊幕臣の女なり、明治の初年今の文部省構内なる、神田一ツ橋内女學校に入學し、才秀其比を見す、夙に歐米和漢の科學に長通し、和歌に妙にして亦筆蹟を克くし一毫龍舞雲躍の勢あり、當時京都に於ける、和歌會に於て其英名紳々たり、又絲竹の道に秀で插花茶の湯の技に熟す、温厚にして學徳兼ね備り、婚を請ふ者引も切らず、遂に迎られて中久木氏に嫁す、よく姑舅に仕へ家政の局に親裁して其宜しきを得閑間會つて心の學なる一篇を草し常に訓説以て奴婢を戒む、又讀書を愛して老後筆硯と俱に之を樂しむ、實に學徳並なきの令閨、日本的夫人の巨擘たり。

高谷佐平と其夫人

高谷佐平氏は高知縣の人、板垣伯の甥なり、夫人をてい子といふ、度量あり、氏の會て陸軍の上長官となるや、健才を以て同僚間に優遇せらる、板垣伯又氏を信じ、諸事を擧げて之に委す、時に伯三千圓を他に贈送するの約あり、氏に托して到らしむ、氏其金を以て愛娼を落籍し、御殿山の邊に假寓し、旬日三千圓を盡し遂に伯の勘氣を蒙る、てい子此間に在つて百方伯に請願し之に力む、亦頗る卓見あり、中江篤介、島本仲道等の名士に結び二十四年遂に伯を説いて大隈伯と合同するの序を啓く蓋し犬養氏等の周旋興て力ありしと雖も内助夫人の効亦偉大なり、真に近代の女傑と稱すべし。

堀越寛介と其夫人

日本生命保險株式會社社長 堀越寛介氏は武藏國北埼玉郡川俣村の人にして安政六年七月を以て生る、家世々農を以て業とし累代地方の豪族たり、父を庭七郎といひ、君は即ち其四男なり、幼にして文を好み學に志し、常に村童を伍して群鷄中の孤鶴たり、麒麟は幼にして克く千里を走ると宜なる哉、君此時に於て已に郷裡に才名あり、長ずるに及んで愈々英慧、年十八出でて羽生町に通見社と稱する政社を創立し君其牛耳を執る、君此時より政界に身を委ね、後自由黨に入りて埼玉地方の部理となる、明治十五年埼玉縣羽生領用水路聯合會、羽生中學聯合會、島川路聯合會等の各議員に當選し共に其議長となり、大に公共の事業に盡す所あり、翌年金融大に引迫し五穀稔らず、地方の里人之が爲めに納税に苦む者隨る夥し、君之を坐視傍觀するに忍びず、卒先自ら有志を唱導し俱に謀て田租延納款願の任に中り力を盡して之が斡旋に勤め遂

に其功を奏して郷人の嬉ぶ所となる、之より皆君が偉風を慕ふて母事す、亞で同年羽生領上川侯元引水口附洲の爲め水口を妨げ村民皆灌漑の不便を訴ふ、君之を見奮て引水口模様替の工事に着手し衆民の爲め之が改全の功を收めしより爾來郷民再び水利の便に浴する事を得、茲に於てか村民一同君が徳を稱し其引水口を呼んで寛介堀といふに至る、君が如斯く公共の事業に力を致せし唯之に止まらず、其多き事拙筆の克く盡す處にあらんや、明治十八年君衆の推す處となり選に當りて埼玉縣會議員となりしかど、君當時の勢況を見て私に感ずる處あり、後職を辭して出京し小石川なる同人社に入りて英學を専攻し尋で東京專門學校に轉じ政事法律の二學を研究す、降りて二十二年七月終に業を卒へて繪入自由新聞、東西新聞社等に入り専ら之を操縦に力も盡す、二十三年帝國議會の初めて開かるるや、衆望の推選する處となり埼玉縣第四區より之が候補者となり當選して衆議院議員の榮職に上る、爾來選に當る事前後二回、明治二十七年中有志と共に對外

硬派を興す、君は其鋒々たるものなり、時に同志の議員六派に分裂して區々其行動を異にし大に其機を失するの虞あり、君夙に之を前察し其合同を唱へて終に合併し進歩黨を組織す、君亦常に藩閥内閣の有害を主張し其著書に演説に之を唱導するは世人の克く知る處なり。君身を政界に置くの傍ら其隻手を實業界に伸張し自ら温交俱樂部なるものを創設し地方實業の改進發達を企圖し今や全國實業團體の會長前田正名氏と共に互に氣脈を通ずるに及ぶ、是より先明治二十年の頃佛國の組織に則り物品保管荷爲替貸金をなす、今の羽生倉庫之なり、君創設以來其社長となり功績頗る見る處あり、又其代議士となるや、院内に於ける實業熱心家を結合し、實業俱樂部を東京に設け、降りて明治二十九年大日本生命保險會社の信用地に墜ち將に破産に陥らんとし、重役株主等警到狼狽す、走つて君に之が救済の件を懇請す、君乃ち起つて同社に入り其社長となりて大に整理に盡し衰勢を挽回して其信用を復活せしめ今や駸々乎として盛大に歩を進めつる

あり、君が健腕實に該社をして當時有数の保險會社たらしめしは世人の稱賛する處なり、君今尙繼續して現に其社長たり、君又夙に文操に富み餘暇著す處の書頗る夥し、今其有名なるものゝみを摘記せば次④如し、國會議員選定鑑、國務大臣責任論、男女異權論、内地雜居得失論、條約實行論、戰後通商策等とす、君の夫人は夙に學識英才あり、よく家政の道に通じ、常に質素儉節を旨とし又自ら箕箒を執て卒先奴婢に先ち之を指揮す然も性温雅又頗る風姿あり、氏の大日本生命保險會社長となるや、夫人内に在つて自ら會計の局に當り嚴に時日を定めて之を出納し更に黃白を家に留めず裕れる處皆之を銀行に預く、爲めに年々歳々利潤蕃増し、氏をして内顧理財の勞なからしむ、之實に夫人が經濟の手腕宜敷を得たる處によると云はざるべからず、夫人又氏に仕へて貞淑、新二氏の才と共に世の稱讚する處となる。

原亮三郎と其夫人

現下の書肆中教科書專刊を以て同業者間に巍然一種の勢力を有し嘗つては帝國の代議士として近くは日本銀行の重役として政に商に其雙手を伸ばして堅進有爲の名を博しつゝある金港堂の主人原亮三郎氏は美濃の國岐阜の郷士なり、明治の初年風雲の機を好しとなし、大志を懷きて上京し轉々遂に神奈川縣の屬官となり、其學務科に奉職中教科用書の儲益夥多なるを慧知し、夫より官を辭して書肆を開き幾多の辛酸を歷て遂に今日の盛大を見るに至りしなり、君の初めて本町三丁目書店を創開せし當時資金尙未だ裕ならず、家政の困難又頗る非常にして到底局外者の想知し能はざる程なりき、此難爲の間に在つて克く君を贊助し、其隻手となりて獻身家運の隆盛に盡し、而して以て今日の繁榮を來せし所以のものは、蓋し君が夫人の内補與て効ありしといはざるべからず。

夫人名をい子といふ、嘉永三年岐阜縣羽栗郡竹ヶ鼻村に産る、少桃三五にして君に嫁し、翌年長男亮一郎氏を挙げ、以て來茲に三十有七年篤養頗る親和し男女總て十八人を産む、夫人年若くして已に家庭をなせしを以て常人の如く悠々たる間に學術教育を授かる事能はざりしと雖も、然も夫人が奇慧快活なる氣骨と、英邁機敏の健腦は克く其全たからざりしを補ひ、其記憶力の豊富なるを算筆に熟達せることは夫人が最も長所とする處にて恰も活たる大福帳の如しと稱せらるゝも又過言に非ざるを知るべし其最初書店を開かれし當時に在つては、自ら筆を執て婢奴を指揮し、日々家に來る處の魚夫が肩にする魚類は其値廉ならずとなし、毎朝小僧を携へて魚河岸に到り、自ら其費すべき、采膳の料を買め、儉勤厨内の冗費を節し、夫君の外出するや、商品一切の出納より製本屋の催促に至る迄、事大となく、少となく自ら進んで其局に當り、常に數十個の鍵を帶間にさげ、店頭帳簿格子の内に在つて手代番頭を使役し、専ら家業の隆盛に身を盡して寸閑なく、爲めに其當時は席暖かなる能はざりきといふ、其功積

で今日の盛大に至るや、意を用ひて子弟の教育に勤め、又専ら慈善事業に盡して老後の樂となす、然れば、到る所苟も慈善事業として目せらるゝものにして必ず夫人の名を見ざるは無し、吁又偉なる哉、夫人雅量大にして常に野卑を好まず、下賤を憐む頗る篤し、居常快活夫人一度腕車に乗じて外出するや、車夫に與ふるに圓助の御祝儀と紺足袋一足を以てすといふ、其磊風亦凡に秀づと謂つべし。方今文弱に流れんとする現下の社界實に夫人の如きは眞に女流の偉魁、閨秀中の閨秀と稱すべし、茲に特に載して卷末の殿傑と爲す、即ちれい子夫人の名世の閨閣輩に比し正に一頭地を抜くの概あればなり。

名士名家の夫人 終